

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

大橋 照枝

1. はじめに

ヒマラヤ山脈の東側の内陸にある人口68万人の小国ブータンは、ジグメ・シンゲ・ワンチュク第4代国王（在位1972～2006）の提唱する“GNP（国民総生産）よりGNH（国民総幸福）”のもと、2008年より立憲議会制民主主義国に政治体制を変換し、ブータン憲法（2008年7月18日施行）第9章「国の政策の原則」の中で、「GNHの実現を強く推進する」とうたいGNHを国是としている。

GNHの具体的内容については、1998年のジグメ・イエゼル・ティンレイ現首相（当時ブータン王国議会議長）が、韓国ソウルで講演したときは、4本柱（経済的自立、環境保護、文化の推進、良き統治）がうたわれていた¹⁾。2006年に、ブータン総研（Centre for Bhutan Studies: CBS）は、GNHの9つのカテゴリーを決定した。即ち①地域の活力、②文化の多様性、③教育、④時間の使い方とバランス、⑤生活水準・所得、⑥人々の健康、⑦良き統治、⑧精神面の幸福、⑨環境の多様性と活力である。

その9つのカテゴリーについて、ブータン国民へのフィージビリティ調査が、第1回（2006年9月～2007年1月に9県、350サンプル）と第2回（2007年12月～2008年3月に12県、950サンプル）で行なわれた（第3回が2010年に8000サンプル、249の質問で行なわれているが結果については、2011年4月2日にSamdrup Jongkhar県のもものが速報的に計83頁の図のみでアップされた状況である）。

第1回の調査結果は、オクスフォード大学 OPHI（Oxford Poverty & Human Development Initiative）部長のサビーナ・アルカイア博士らの論文としてまとめられ²⁾、筆者大橋は、著書・論文等で紹介した³⁾。

第2回調査結果は、GNHの9カテゴリーについて、環境カテゴリーを除く、8カテゴリーについての報告論文が、ブータン総研の研究者らによってまとめられている。

それらは、執筆者の個々の考え方で、別々のパターンで書かれ、各カテゴリーの結論が、国のGNH向上への政策提言として必ずしもまとまったものとはなっていない。

また8論文の研究結果を統合して、ブータンのGNH政策にどういう提言をしていくのかといったまとめの論文も探してみたが見つからない。

8論文からは、我々先進工業国がとっくの昔に失ってしまった。そしてGDP（国内総生産）にカウントされることのない、地域社会での互助・互恵や、家庭、学校、職場で、人と人との絆、つながりを大切にする「ダイグラム・ナムザ精神」など、チベット仏教カーギュ派の教え

(互助・互恵、知足・少欲、平和、平等、富の公平分配など)が世代を超えて浸透し、それが幸福感にプラスしている面(家族共同体・地域共同体、地縁・血縁が生きていること)が確認できた。

また、お祈りやスピリチュアルな面を大切に、それが、幸福感を増しているといった我々先進工業国の人間が、ブータンへあこがれる面も確かに生きていると確認できた。

それによって、ブータンの所得貧困レベルの比率が23.2% (2006年)であるにもかかわらず、国民の97%が幸福(2005年国勢調査)と答える、ヒマラヤの桃源郷のような国を維持することもできたのであろう。

しかし、ブータンでも経済発展をとげている首都ティンプーと、道路・交通も不便で所得貧困層も多い地方との幸福感、満足度の格差も第2回調査結果で明らかになっている。

今後ブータンが、経済発展をとげ、都市化が進む中で、我々先進工業国の人間が、ブータンにあこがれている良い面が失われていくことも危惧される。

本論文は、第2回GNHフィージビリティ調査結果の検討と分析、その中から予想されるブータンの今後のGNH政策への提言などをまとめていく。

2. 第1回GNHフィージビリティ調査のアウトライン

2.1 GNHの特性

i) ブータンのGNH指標には持続可能性の定義の1つである「社会」「環境」「経済」(トリプルボトムライン)⁴⁾が構成要素に含まれており、持続可能な社会指標であるといえる。

つまりGNHの9カテゴリーには「社会」(地域の活力、文化の多様性、教育、時間の使い方とバランス、人々の健康、良き統治、精神面の幸福)

「環境」(環境の多様性と活力)

「経済」(生活水準・所得)が組み込まれている。

ii) GNHは「包括的概念」である。

サビーナ・アルカイア博士らの論文では「GNHのコンセプトは西洋的なコンセプトよりも包括的であり、文化、精神性、生態系、統治も含まれている」⁵⁾としており、また、ジグメ・Y・ティンレイ現首相は、前述の1998年の韓国ソウルでの講演で「GNP、GDPといった従来の豊かさの尺度は、量で測られていたが、ブータンのGNHは精神面の幸福のように、量で測れない目標を発展のビジョンに置いている」と語った。

つまりGNHは、定量的というより定性的特性を多くもっており、インターネットのアンケート調査のように、数分~数十分で回答できるものではなく、1人の回答者へのインタビューに半日以上かけている。

2.2 第1回調査の概要と方法

i) 2006年9月~2007年1月、15歳以上の350サンプル(有効サンプル数303)

調査対象: ブータン全20県中9県 (Paro, Punakha, Thimphu, Trongsa, Bumthang, Mongar, Lhuentse, Chukha, Sarpang)

ii) 9分野につき計57のサブ的質問が設定された。

- | | |
|----------|-----|
| ① 地域の活力 | 10問 |
| ② 文化の多様性 | 13問 |

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

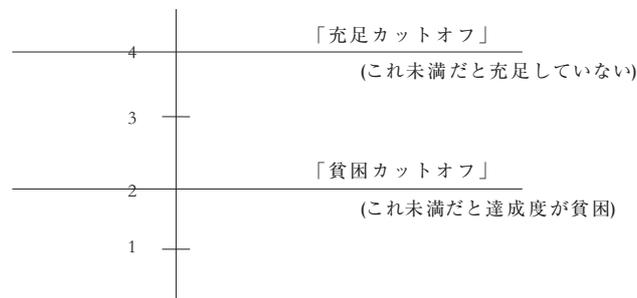
③ 教育	3問	
④ 時間の使い方とバランス	2問	
⑤ 生活水準・所得	8問	
⑥ 人々の健康	6問	
⑦ 良き統治	7問	
⑧ 精神面の幸福	6問	
⑨ 環境の多様性と活力	2問	計 57問

iii) GNH 集計の考え方 (定性的質問を定量化するために)

例えば②文化の多様性に対しては13項目の副次的質問項目がある。その中の1つ「スポーツ」の項で「伝統的スポーツの実施頻度」を聞いている。

その場合、「まったく行っていない」と回答した人の充足感を1という数値にし、「週1回以上行っている」とする人の充足感を4という数値にする。そして4以上の人は充足度が高いので、4を「充足」の基準値にして「充足カットオフ」とする。また年に1回ぐらい行っている人の充足度を2として、これ未満だと達成度が貧しいということで2を「貧困カットオフ」とする (図1)。このように2つのカットオフを用いて57指数 (図2では56指数) について「充足カットオフ」未満と「貧困カットオフ」未満の%を図示したものが図2である。(またサビーナ・アルカイア論文では57項目の「充足カットオフ値」と「貧困カットオフ値」の決定値を項目ごと示している。⁶⁾)

図1 例えば「文化の多様性」の指標の中の「伝統的スポーツ」の実施頻度の評価



2.3 第1回調査結果のまとめ

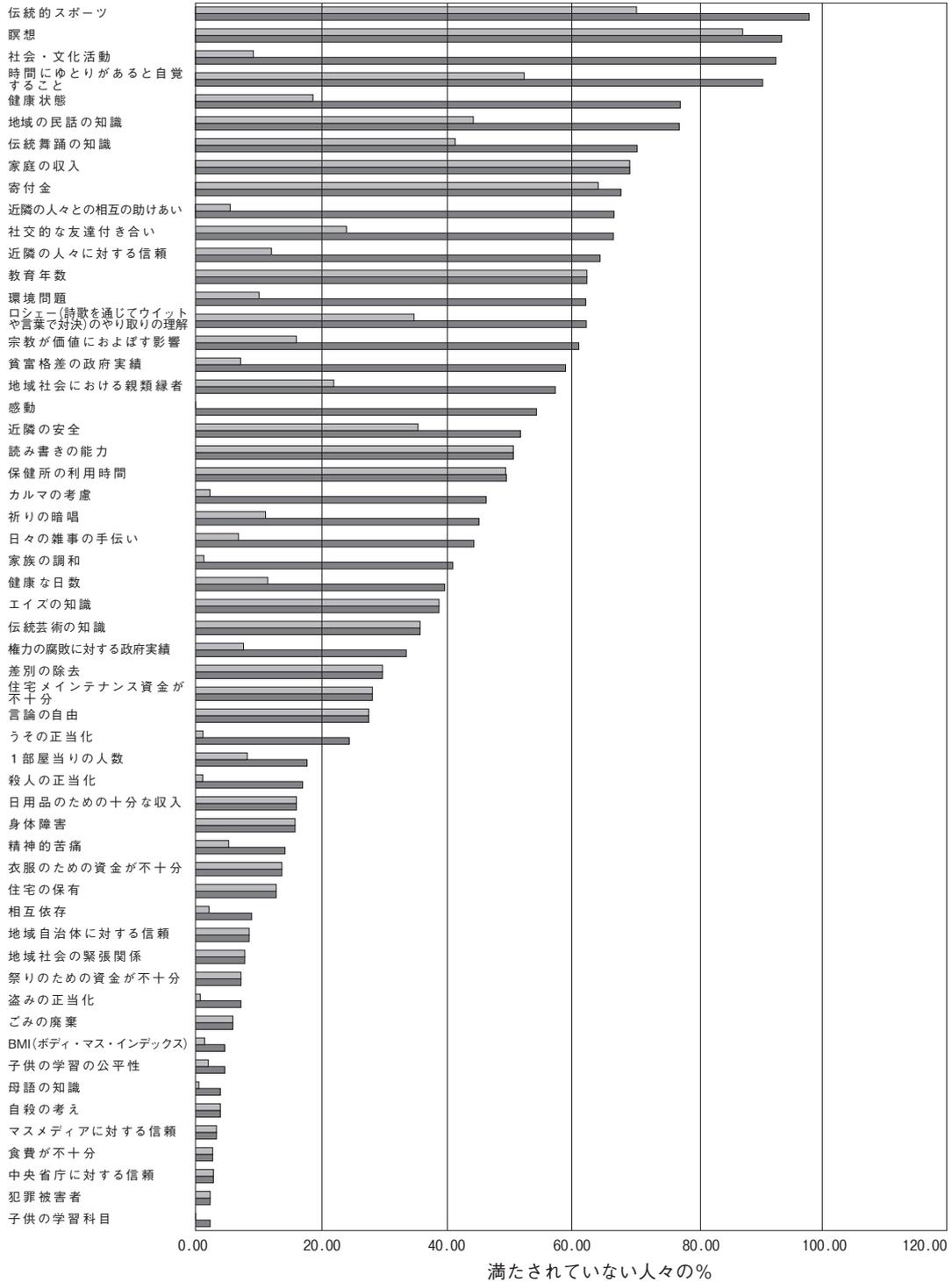
サビーナ・アルカイア博士らの論文は次のようにまとめている。

「女性の貧困は、人数において、またすべての多次元の貧困尺度においても、男性より高い。例えば少なくとも3つの欠乏で苦勞している人々の73%は女性であり、男性は27%である。女性の貧困の相対的上昇は、たとえ欠乏の数が男性と女性で同じであったとしても、女性の貧困は男性より重大である。

この論文は、ブータンのGNHの一貫した目的である貧困の測定方法を明らかにしたものである。このGNH調査はブータンの一部でのみ行なわれたものであり、先導的傾向を見たものであるがとくに女性の貧困が特徴づけられた。」(要旨のみ)⁷⁾

このようにサビーナ・アルカイア博士の主導する論文だけにOPHI (Oxford Poverty & Human Development Initiative) の本領である「貧困」研究をブータンのGNHの分析の中心に置いたまとめとなっている。確かにブータンは貧困である。しかし助けあいや精神的サポート

図2 各指標について「充足カットオフ未満」(下段)、「貧困カットオフ未満」(上段)の%



出典: Sabina Alkine et al. 2008, Gross National Happiness and Poverty in Bhutan: Applying the GNH Index Methodology to explore Poverty, p.12

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態というアジアの仏教的文化については全くふれられていない。ただし、女性の貧困をクローズアップした点は、多くの男性研究者には欠けている「ジェンダー視点」が強調されたことで、一つの成果といえる。

3. 第2回 GNH フィージビリティ調査

3.1 第2回調査の概要

調査期間は2007年12月～2008年3月で950サンプル。ブータン20県中12県 (Dagana, Tsirang, Wangdiphodrang, Samtse, Zhemgang, Samdrupjongkhar, Trashigang, Pemagatshel, Trashiyangtse, Gasa, Haa, Thimphu) で行なわれた。

トータルサンプル数は950であるが、質問によって有効サンプルが異なっている。質問項目は、第1回は計57問であったが、第2回は、計72問となっている。しかし、第2回は、9カテゴリーのうち8カテゴリーについて、ブータン総研の研究者がそれぞれの担当分野のみ集計分析しており、トータルに全体を分析した論文はない。

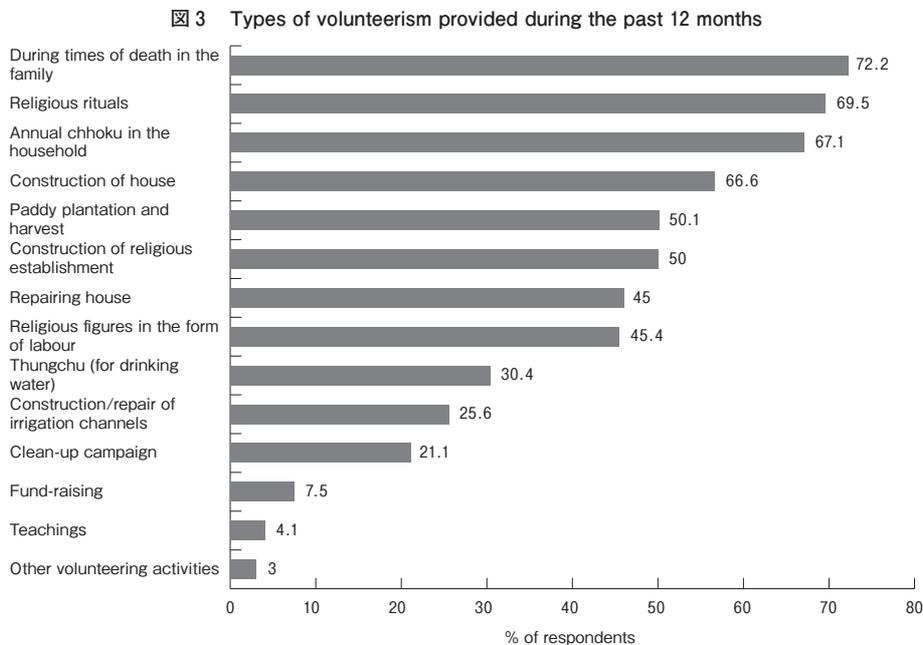
以下、8論文から、ブータンのGNHの実態と、光と影をとらえていきたい。

3.2 地域の活力⁸⁾

地域の活力は、経済的側面や物質的發展とは別に、生活の質、幸福にとって重要である。

まずボランティア活動の活動率は、51.9% (表1) となっており、『寄付白書2010』(日本ファンドレイジング協会編、2011、日本経団連出版) にみる日本のボランティア活動率36.1% (2009年) や米国の同26.8% (2009年) より高く、英国の66.0% (2009年) より低い。

ボランティア活動の内容は、図3のように家族が亡くなったとき、宗教的行事、毎年のチョ



クるとき（チョコとは毎年11月末～1月初めに、家族全員が集まり、家族の守護神に1年間の平穏に感謝し、翌年の無事を祈る行事）、田植や収穫、宗教的建造物の建設、住宅の修理などといった、宗教的行事や農作業、住宅の修理などの助けあいが上位を占めている。サービス産業の発達した先進諸国ではこれらの活動や作業に地域の人手を借りることは少なくなっているし、ブータンでも、表1のように、都市部のボランティア活動率は地方より低い（但し、サンプル数をみても、地方が791に対し、都市は158と、都市部の人口はまだ少数派である）。

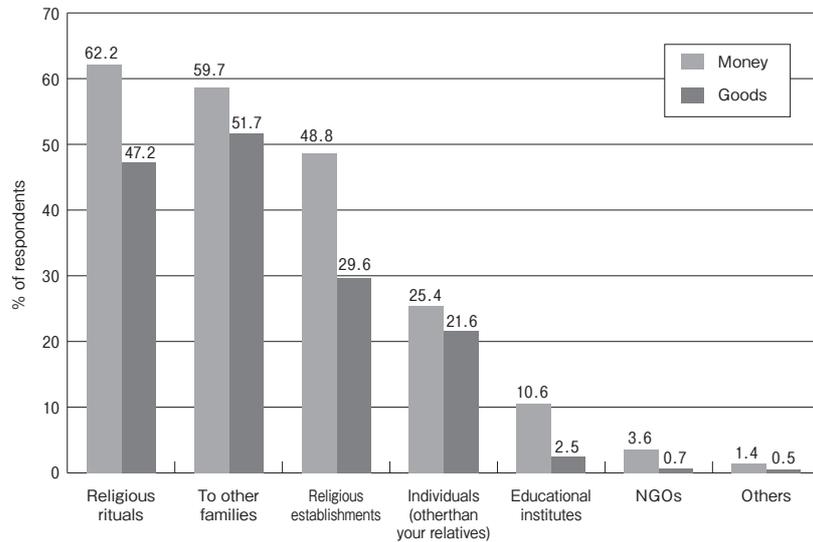
表1 Voluntary help by area of residence

Area of residence		Voluntary help		Total
		Yes	No	
Rural	Count	437	354	791
	% within area of residence	55.2%	44.8%	100.0%
Urban	Count	56	102	158
	% within area of residence	35.4%	64.6%	100.0%
Total	Count	493	456	949
	% within area of residence	51.9%	48.1%	100.0%

次に寄付については、表2のように寄付率は88.7%と高く、前出の『寄付白書2010』にみる、寄付をした個人または世帯の割合は日本の場合34.0%（2009年）、米国65.5%（2009年）、英国54.0%（2008年）より高く、ブータンの寄付率の高さは群を抜いている。

寄付の形としては図4のように、“金銭”と“物”の双方とも行なわれており、一人当たり寄付額はNu. 2840。日本円で5,321円と、ブータンの人にとって決して少額ではない。

図4 Types of donation



ボランティアと同様、寄付する率も、都市部より地方の方が高く（表2）、地方の寄付率は90.5%あるが、都市部はそれより10ポイント強少なく、79.9%に止まっている。

ブータンの第2回 GNH（Gross National Happiness：国民総幸福）調査結果にみる「幸福立国」の実態

表2 Donation by area of residence

Area of residence		Did you provide donation?		Total
		Yes	No	
Rural	Count	716	75	791
	% within area of residence	90.5%	9.5%	100.0%
Urban	Count	127	32	159
	% within area of residence	79.9%	20.1%	100.0%
Total	Count	843	107	950
	% within area of residence	88.7%	11.3%	100.0%

以上のように、ブータンのボランティア活動や寄付活動は、宗教にまつわる行為が中心で、チベット仏教カーギュ派の互助・互恵が生活の中に深く浸透していることがわかる。

また、地域社会に帰属意識の高い人ほど、ボランティア活動率（表3）、や寄付行為率（表4）が高くなっている。

表3 Sense of belonging to your local community and voluntary help

Sense of belonging to your local community		Voluntary help		Total
		Yes	No	
Very strong	Count	315	261	576
	% within sense of belonging	54.7%	45.3%	100.0%
Somewhat strong	Count	167	168	335
	% within sense of belonging	49.9%	50.1%	100.0%
Weak	Count	11	24	35
	% within sense of belonging	31.4%	68.6%	100.0%
Total	Count	493	453	946
	% within sense of belonging	52.1%	47.9%	100.0%

表4 Sense of belonging to your local community and donation

Sense of belonging to your local community		Did you provide donation?		Total
		Yes	No	
Very strong	Count	520	57	577
	% within sense of belonging	90.1%	9.9%	100.0%
Somewhat strong	Count	296	39	335
	% within sense of belonging	88.4%	11.6%	100.0%
Weak	Count	25	10	35
	% within sense of belonging	71.4%	28.6%	100.0%
Total	Count	841	106	947
	% within sense of belonging	88.8%	11.2%	100.0%

地域社会への帰属意識は“非常に高い”と“やや高い”を合わせると全サンプルの96.3%と高く、ブータン人が地域社会に深く密着し、助けあって生きていることが反映されている（表7）。そして、表5、表6のようにボランティアや、寄付をする人の「幸福」度がしない人より高

い。互助・互恵がブータンの人々の喜びにつながり、幸福度を増していることが確認できる。
 但し、都市に住む人には、地域社会への帰属意識が地方に住む人より薄れていることも見逃せない(表7)。

表5 Voluntary help and happiness

Did you provide voluntary help?	Mean happiness level	N	S. D
Yes	6.23	493	1.951
No	6.05	456	2.053
Total	6.15	949	2.001

表6 Donation and happiness

Did you provide donation?	Mean happiness level	N	S. D
Yes	6.17	843	1.981
No	5.95	107	2.152
Total	6.15	950	2.001

表7 Sense of belonging to the local community by area of residence

Area of residence		Sense of belonging to your local community			Total
		Very strong	Somewhat strong	Weak	
Rural	Count	535	235	21	791
	% within area of residence	67.6%	29.7%	2.7%	100.0%
Urban	Count	42	100	14	156
	% within area of residence	26.9%	64.1%	9.0%	100.0%
Total	Count	577	335	35	947
	% within area of residence	60.9%	35.4%	3.7%	100.0%

表8 Sense of belonging to your local community by age category

Age category		Sense of belonging to your local community			Total
		Very strong	Somewhat strong	Weak	
0-17	Count	27	28	4	59
	% within age category	45.8%	47.5%	6.8%	100.0%
18-30	Count	199	167	19	385
	% within age category	51.7%	43.4%	4.9%	100.0%
31-45	Count	178	81	7	266
	% within age category	66.9%	30.5%	2.6%	100.0%
46-60	Count	121	47	4	172
	% within age category	70.3%	27.3%	2.3%	100.0%
Above 60	Count	52	11	0	63
	% within age category	82.5%	17.5%	.0%	100.0%
Total	Count	577	334	34	945
	% within age category	61.1%	35.3%	3.6%	100.0%

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

表9 Sense of belonging to the local community by education level

Education level		Sense of belonging to your local community			Total
		Very strong	Somewhat strong	Weak	
No formal education	Count	396	139	14	549
	% within education level	72.1%	25.3%	2.6%	100.0%
1-6	Count	76	37	1	114
	% within education level	66.7%	32.5%	.9%	100.0%
7-10	Count	62	87	10	159
	% within education level	39.0%	54.7%	6.3%	100.0%
11-12	Count	19	35	3	57
	% within education level	33.3%	61.4%	5.3%	100.0%
Further education	Count	22	36	7	65
	% within education level	33.8%	55.4%	10.8%	100.0%
Total	Count	575	334	35	944
	% within education level	60.9%	35.4%	3.7%	100.0%

また、地域社会のコミュニティへの帰属意識は、年齢が若いほど（表8）、高学歴になるほど（表9）“非常に強い”が低下している。

後続世代になるほど、またブータンが力を入れている教育の水準が高くなるほど、地域社会への帰属意識が薄まっていくことは懸念される。

また驚くべきことに、安全な国とされるブータンで、都市化の進んだ県ほど“めったに安全でない”が高く（表10）、首都ティンプーではその比率は21.6%にもなり、“常に安全”は31.8%に止まっていることである。

表10 Safety from human harm as % of respondents by dzongkhags

	Always safe	Usually safe	Rarely safe
Haa	72.7	21.8	5.5
Zhemgang	72.9	20.3	6.8
Pemagatshel	67.9	22.6	9.5
Trashiyangtse	71.4	17.9	10.7
Wangdiphodrang	69.5	18.6	11.9
Samtse	65.1	22.9	12.0
Trashigang	66.2	21.1	12.7
Gasa	69.0	17.2	13.8
Dagana	65.6	19.8	14.6
Samdrupjongkhar	56.8	27.3	15.8
Tsirang	66.7	16.7	16.7
Thimphu	31.8	46.6	21.6

このパートの執筆者は「首都ティンプーへの相対的に高い行政施策や予算の配分が、社会資本 (Social Capital) の相対的上昇を伴っていない。ティンプーの幸福度を上げるためにはもっと多くの予算が必要だ」と結論づけている。もちろん、ティンプーが、ボランティア率、寄付

率で低く、助けあいの感覚も弱いことを認めてはいるが、都市化が、そういう地域愛を弱めていることは特に指摘していない。

3.3 文化の多様性²⁾

ブータンの毎日の生活の伝統を守ることを“非常に重要”と考える率が86.3%にのぼる。表11のように“非常に重要”の比率は年齢が高いほど高い。

表11 Importance of maintaining Bhutanese traditions by age group

Age category		How important is it to you to maintain Bhutanese traditions within your everyday life?			Total
		Not important	Important	Very important	
0-17	Count	2	12	44	58
	% within age category	3.4%	20.7%	75.9%	100.0%
18-30	Count	4	55	325	384
	% within age category	1.0%	14.3%	84.6%	100.0%
31-45	Count	3	28	235	266
	% within age category	1.1%	10.5%	88.3%	100.0%
46-60	Count	1	18	153	172
	% within age category	.6%	10.5%	89.0%	100.0%
Above 60	Count	0	6	57	63
	% within age category	.0%	9.5%	90.5%	100.0%
Total	Count	10	119	814	943
	% within age category	1.1%	12.6%	86.3%	100.0%

“人生の目標で、最も大事なこと”は「家族生活」、第2位が「責任感」、以下「キャリアで成功を納めること」「精神的誠意」「経済の安定」「思いやり」「友情」「寛大」「物質的な富」「互恵」「自由」「快樂」と続く(表12)。

表12 Importance of life goals as % of respondents

	Not important	Somewhat important	Very important	N
Family life	0.1	4.8	95.1	950
Responsibility	0.3	7.9	91.8	949
Career success	0.3	9.4	90.3	949
Spiritual faith	0.3	12.0	87.7	950
Financial security	0.3	12.1	87.5	947
Compassion	0.4	16.8	82.8	948
Friendship	0.1	18.8	81.1	950
Generosity	0.4	20.2	79.3	949
Material wealth	0.6	20.1	79.2	949
Reciprocity	2.1	22.5	75.4	948
Freedom	1.6	27.7	70.7	948
Pleasure	2.3	33.6	64.0	948

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

ブータン人は家族を大切に、筆者の調査でも、一番幸せなときは“家族といっしょのとき”との答えが最も多かった。経済的安定は、5番目に重要としており、物質的富や、自由、快樂は低い位置にある。

しかし、ここ2～3年間に価値観に大きな変化が生じたこととして、「物質的富」をより多く考えるようになったという割合が最も高く、81.7%を占めている。より少なくなったことは「正直さ」である (表13)。

表13 Changes in values of people in general as % of respondents during the last few years

Values	More	Stayed the same	Less	N
Spirituality	64.9	24.8	10.3	944
Compassion	58.7	30.8	10.4	938
Tolerance	45.9	36.3	17.8	937
Honesty	35.1	38.6	26.3	927
Concern about material wealth	81.7	17.1	1.2	941
Selfishness	43.5	37.6	19	932

物の豊かさへのブータン人の意識が、清貧から物欲へシフトしていることが示されているが、表13で「精神性」をより多く考えるようになったというのも、「物質的富」に次いで64.9%を占めており、物欲のみにつつまれるのではなく、いくらかバランスしている面も見受けられる。

“子供に学ばせることの重要性”のトップは「両親を尊ぶこと」で、「しつけ」「目上を尊ぶ」「家族や親戚の世話をする」「一生懸命働く」「正直さ」「目上に従う」「隣人を助ける」「公平」「他の人に対してがまんする」「独立性」と続き、日本の子供の教育には、すっかり忘れられている価値観が、ブータンでは生きているといえる (表14)。

表14 Importance of qualities for children to learn as % of respondents

Qualities	Not important	Somewhat important	Very important	Don't know	N
Independence	5.2	17.5	76.5	0.8	948
Tolerance for other people (<i>Zoeba</i>)	0.8	15.3	83.9	0	948
Impartiality	4.2	10	84.9	0.8	948
Helping neighbours	0.2	11.2	88.5	0.1	948
Obedience to authority	0.2	5.6	94.1	0.1	948
Honesty	0.2	4	95.8	0	945
Hard work	0.2	3.4	96.3	0.1	948
Caring for family members and relatives	0.2	2.5	97.2	0.1	948
Respect for elders	0.2	2.1	97.7	0	949
Discipline (<i>Drig</i>)	0.2	2	97.8	0	948
Respect for parents	0.2	1.5	98.3	0	949

“住んでいる地域の「民話」の重要性”について、地方の人達で「最も重要」が65.7%と高く、都市部の人々の46.5%を大きく上回っている (表15)。

表15 Importance of folk tales by area of residence

Region		Importance of folk tales				Total
		Not Important	Important	Very important	Don't know	
Rural	Count	12	244	520	15	791
	% within area of Region	1.5%	30.8%	65.7%	1.9%	100.0%
Urban	Count	3	77	74	5	159
	% within area of Region	1.9%	48.4%	46.5%	3.1%	100.0%
Total	Count	15	321	594	20	950
	% within area of Region	1.6%	33.8%	62.5%	2.1%	100.0%

次に、幸福の国ブータンにとって、あるまじきことであるがジェンダーについての、いわば迷信のようなものが、現在も堂々と信じられている。

図5のように、「女性はけがれている（だから、お寺の内部へ入ってはいけない）」といったことに“同意する”率が74.3%もある。

また“女性は、男性より家事に向いている”に同意する率も55.3%ある。救いは「教育は、女子より男子にとって重要」に反対する率が80.5%あることである。

もう一つジェンダーでショッキングなのは図6のように、「女性はけがれている」に“同意する”率が男性71.9%に対し女性76.6%と女性の方が多くことだ。これはやはり宗教の伝統から来ているものであろう。学校教育で改めるべきであろう。

次にブータンらしい民族文化が躍如としているデータがある。ブータン人が、さい先のよさを祈る方法として図7のように、トップは「バターランプに火をともしこと」（86.8%）だ。今回の東日本大震災は、ブータンの人達にも深い悲しみと同情をもって受けとめられ、国王や首相が、ブータン在住の日本人を招いて、バターランプに火をともし、安寧を祈られたと聞いている。

図5 Beliefs related to gender

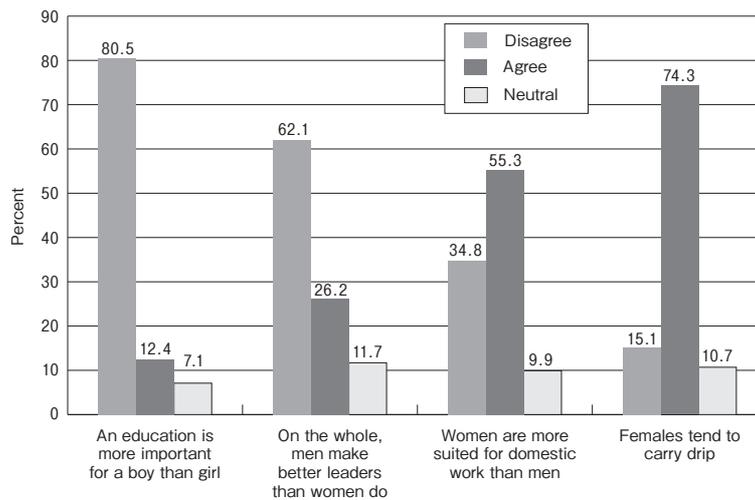


図6 Females carry drip by gender

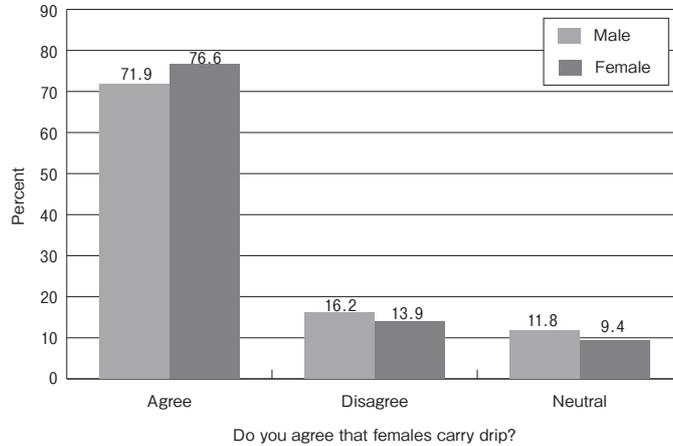
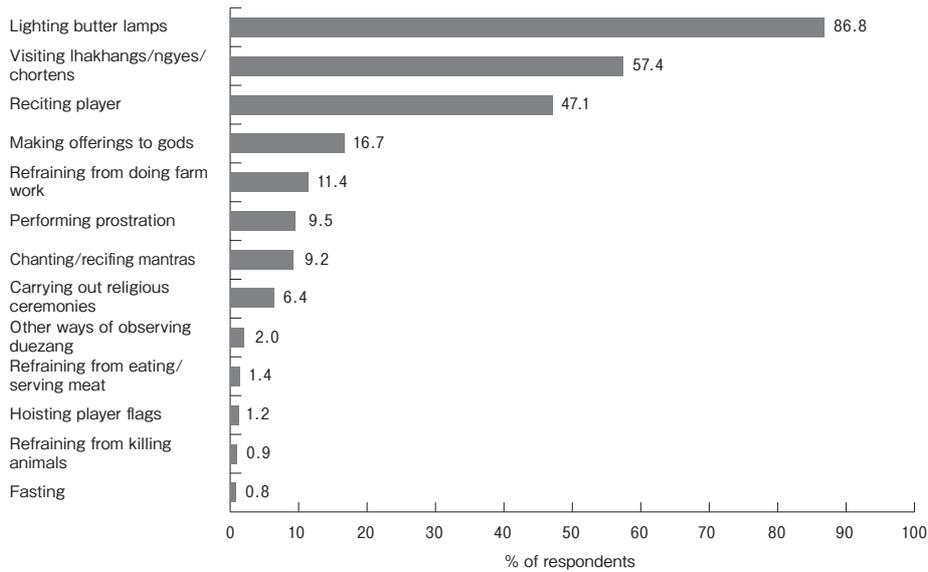


図7 Ways of observing duezang as % of respondents (n=950)



つづいて、「お寺へ行くこと」(57.4%)、「お祈りをとなえる」(47.1%)、「神様に、お供えする」(16.7%)、と、ブータン人の生活の中に、祈り、宗教が深く根づいていることがわかる。

次にブータンでは、社会のセーフティネットになっているともされている「ディグラム・ナムザ」精神。つまり、家庭、学校、職場で、人とのつながりや絆を大切にし、調和ある生活をする事について、93.7%が「重要」と答えている。また61%がディグラム・ナムザは、より強い絆となっているとし、23%が、以前と同じ、16%が、ここ1年間により弱くなっていると答えた。

また、ブータンの人達が、盛り上がるお祭り(ティンパーのお祭りは“チェチュ”と呼ばれる)、89.7%が、お祭りは、より盛り上っているとし、9.7%は、下火になっているとしている。

ところが、12の県で、お祭りに参加する率は、首都ティンブーが最も低く64.4%となっている。これも都市化とともにお祭りの盛り上りは低下していることが見受けられる。

次にスポーツとゲームについては、表16のようにブータン人は、ここ12か月間で一度も行ったことはないというのが、「伝統的ゲーム」で63.5%、「現代風ゲーム」で73.9%と高い。

表16 Frequency of playing games and sports in the past 12 months

Type of sports and games	More than once a week	Once or twice a month	A few times a year	Never	Total
Traditional games	3.8% (36)	8.6% (82)	24.1% (229)	63.5% (603)	100% (950)
Modern games	8.1% (77)	7.2% (68)	10.8% (103)	73.9% (702)	100% (950)

以上のように、仏教文化にのっとった、ディグラム・ナムザ精神を共通の基盤とし、地域の民話や、ブータンの文化を大切にしようとの思いは、全体で86.3%と高く、家族生活を最も大切と考え、子供達へも親を尊うことや、ブータン文化の基本にある仏教の教義を、きちんと学ばせている。

文化で最大の問題は、ジェンダーで、女性への伝統的偏見が強く残っていることだ。この点、第1回調査でサビーナ・アルカイア博士が強調した、ブータンのジェンダー問題は深刻といえる。

3.4 教 育¹⁰⁾

従来、教育は、進学率などで語られることが多かったが、ここでは、歴史・文化、市民性、エコロジー、動植物の固有種の知識といった非公式に得られた知識も重視している。

ブータンでは、正規の学校教育以外に、日常生活の中で学ぶ自然の知識や手工芸などの技術も多く、その面の現状をとらえている。まず、ひいおじいさん、おばあさんの名前を知っている率は、全12県で37.80%。年齢が高くなるほど増え、10代では20.34%だが、60歳以上では51.61%にのぼる（表17）。

表17 Knowledge of the names of great grandparents by age group

Age		Know the names of great grandparents?		Total
		Yes	No	
13-17	Count	12	47	59
	% within age category	20.34	79.66	100
18-30	Count	118	268	386
	% within age category	30.57	69.43	100
31-45	Count	109	158	267
	% within age category	40.82	59.18	100
46-60	Count	87	86	173
	% within age category	50.29	49.71	100
Above 60	Count	32	30	62
	% within age category	51.61	48.39	100
Total	Count	358	589	947
	% within age category	37.80	62.20	100

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

学校教育のレベルが高いほど、生活満足度は高い (図8、図9) と出ており、また、所得が多いほど、学校教育を受けている率も高くなる (図10)。

図8 Respondents reporting good quality of life by education qualification

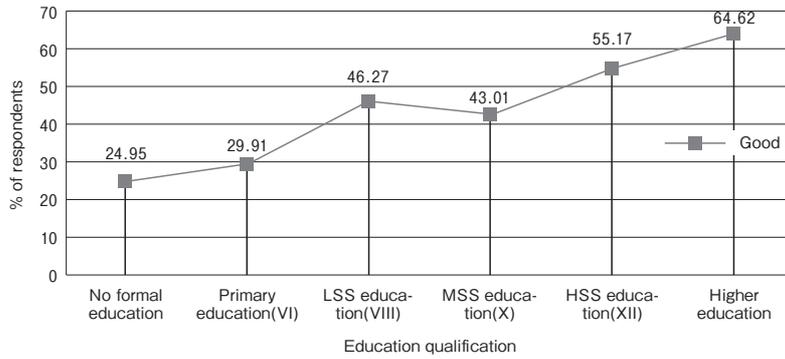


図9 Life enjoyment (Quite a lot) by education qualification

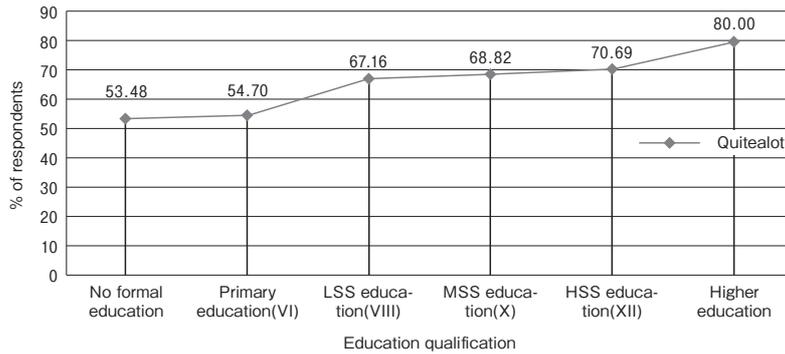
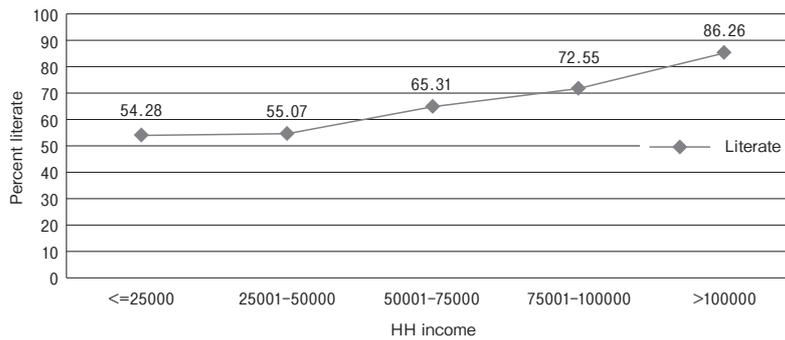


図10 Literacy by household income

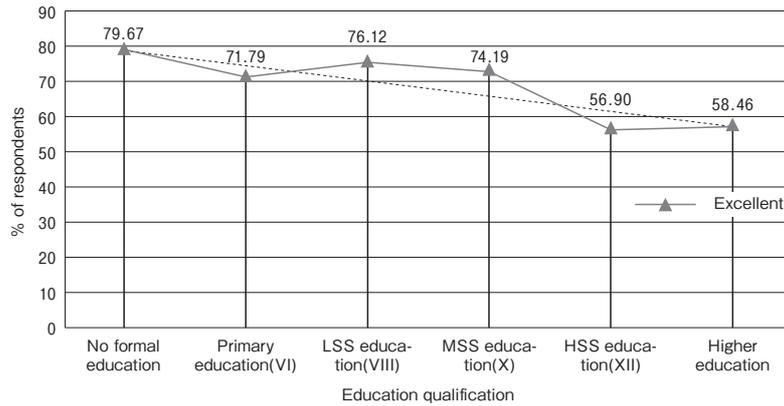


ところが、学校教育のレベルが高いほど、「環境知識」のレベルが低くなる (図11)。ここでいう環境知識とは、“植物の名前”、“動物の名前”、“地域の人々が、毎年ある一定の時期、ある一定の山に入ることを制限すること” (これは法律があるわけではないが、あられや嵐や、

豪雨による災害から人々を守るためのルールである)の知識、魚釣りや狩猟の制限の知識について知っているかどうかや木を植えたりする知識などを意味している。

つまり、学校教育の中では、これらの知識は十分与えられておらず、従って教育度が高くても環境や文化の知識が低く出ていると思われる。

図11 Excellent ecological knowledge by education qualification



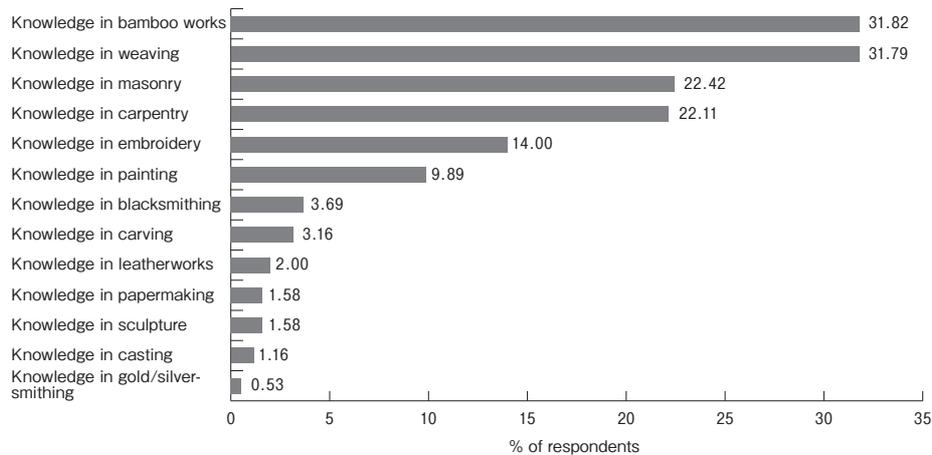
また、こういった環境知識は、地方で高く、80.66%が知っているが、都市部では46.54%に止まっている。

ブータンの芸術や手工芸の技術は、固有の文化であり、長い歴史の中でつちかわれ、文化遺産として継承されてきたものであり、国民の精神と帰属意識の源である。また地域によっても異なる技法が継承されてきた。これらは公式の学校教育以外の技術である。

図12のように、13の技術のうち最も広く人々が身につけている技術は、竹細工 (31.82%)、織物 (31.79%)、石工術 (22.42%)、大工術 (22.11%)、刺繍 (14.00%)、絵画 (9.89%) 等となっている。

次もまた学校教育だけではカバーできない、両親の子供へ与える知識の関与が重要な地域の

図12 Proportion of people reporting knowledge in different arts and crafts



ブータンの第2回GNH（Gross National Happiness：国民総幸福）調査結果にみる「幸福立国」の実態

「民話の語り継ぎ」である。民話の語り継ぎによって、子供達は、時代を超えたモラルや芸術的創造性を学ぶ。表18のように、民話の語り継ぎは、地方で高く（41.6%）、都市部では、31.9%とやや低くなっている。

表18 Folk stories telling by area of residence

		Folk stories			Total	
		Yes	No	No children		
Region	Rural	Count	279	291	100	670
		% within Region	41.6%	43.4%	14.9%	
	Urban	Count	36	42	35	113
		% within Region	31.9%	37.2%	31.0%	
Total		Count	315	333	135	783
		% within Region	40.2%	42.5%	17.2%	100.0%

一方、学校教育の達成目標は、男子では大学までが88.24%だが、女子では76.56%となり、ジェンダーギャップが見られる。これは男子は、高学歴を得て、一家の稼ぎ頭になることが期待されているためと思われると分析者は考えており、従って大学教育まで受けたいとする率は都市部で高く、92.31%であるが、地方では78.49%となっている。

但しブータンの研究者は前述のように、教育を学校教育だけと考えていないので、ブータンの伝統的な歌や、祭りの時のお面や踊りの知識が薄れていることに対し、政府とくに教育省は、対策を講じるべき — としている。同時に、ブータンの伝統的芸術工芸についても、対策が講じられなければ失われていくと危機感を訴えている。

一方で、回答者の57.72%が、公的学校教育を受けていないことへの対策として、基本的な読み書きを、非正規のルートでの教育で行うべきと、政府への提言もしている。

3.5 時間の使い方とバランス¹¹⁾

時間は、経済的、社会的幸福に重要な資源であるが、第2回GNH調査結果から女性の労働時間が男性より長いこと（図13）、とくに主婦では家事労働時間が3.33時間と最も多くを占めていること（図14）、また、労働時間の中で、男女別にみたものが、表19のようになっている。女性が男性より労働時間が長いのが、ビジネスや売買などの仕事。手工芸、家事労働、採石、食料の加工の仕事となっている（表19）。

図13 Time allocated to work and non-work by gender

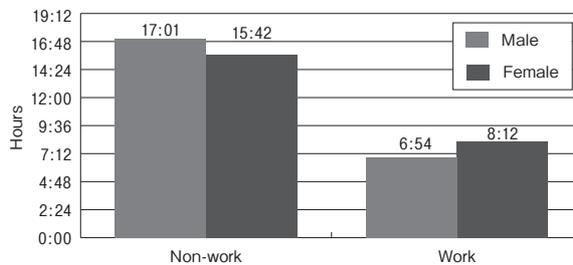


図14 Time allocation of housewives to various activities

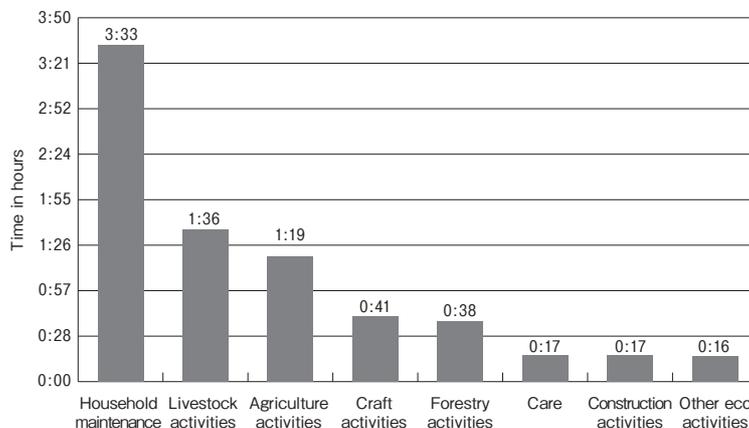


表19 Time spent on various activities under work category

Activities	Frequency		Time	
	Male	Female	Male	Female
Agriculture related activities	96	93	05 : 26	05 : 01
Business, trade and services	95	80	05 : 05	06 : 13
Care of children and sick	29	81	01 : 41	01 : 35
Construction related	52	17	06 : 36	05 : 41
Craft related activities	38	74	04 : 17	05 : 04
Forestry and horticulture	135	99	03 : 44	02 : 34
Household maintenance	329	440	01 : 36	03 : 05
Livestock related activities	190	204	02 : 51	02 : 38
Quarrying work	7	5	04 : 45	05 : 42
Processing of food	34	32	01 : 38	02 : 12
Transporting	2	4	06 : 35	02 : 10

男性の方が労働時間が長いのは、農作業、子供や病人の世話、建設にまつわる労働、林業や園芸、家畜の世話、輸送となっている。

次に地域の活動など、非労働的活動を一覧したものは、表20のように、地域の活動のほか、教育学習、睡眠、身づくり、宗教的活動、社会文化的活動、スポーツ・レジャー、旅行、移動、待ち時間となっている。

そして、これらの非労働的活動の中には、その活動率が高い人ほど、幸福度が高い場合があることが示されている。

図15のように、宗教活動を行う人ほど、また図16のように、お祈りの回数が多い人ほど幸福度が高いと出ている。

また図17のように社会文化的活動をしている人ほど幸福度は高い。

また、図18のようにスポーツ・レジャーを楽しむ人の方が幸福度が高くなっている。

時間の使い方とバランスの結論としては、労働時間が長いほど、生活の質が低いということ(図19)、そして、男性より、女性の家事労働を含めて労働時間が長く、幸福度も男性より低い

表20 Time spent on various activities under non-work category

Activities	Frequency		Time	
	Male	Female	Male	Female
Community participation	33	33	03 : 37	03 : 24
Education and learning	31	39	05 : 20	04 : 38
Sleep	470	467	08 : 34	08 : 33
Personal care (excluding sleep)	470	467	03 : 19	02 : 56
Religious activities	170	169	01 : 44	01 : 22
Socio-cultural activities	283	247	02 : 10	02 : 04
Sports and leisure	190	189	02 : 58	02 : 27
Travel/commute	366	299	01 : 39	01 : 25
Waiting	20	21	01 : 54	01 : 45

図15 Religious activities and mean happiness

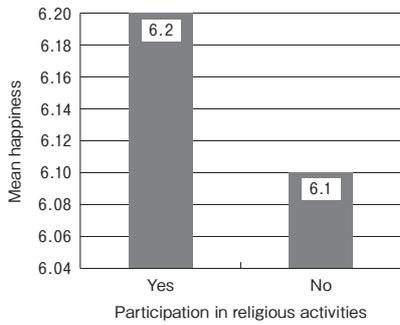


図16 Happiness vs. frequency of praying

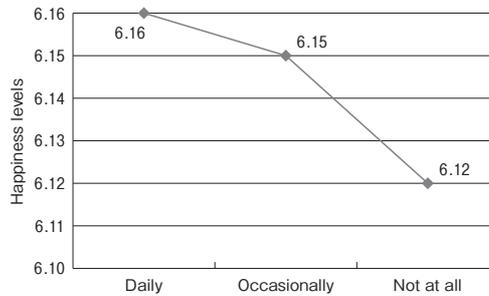


図17 Mean happiness vs. socio-cultural activities

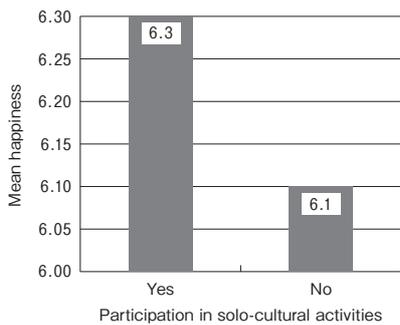
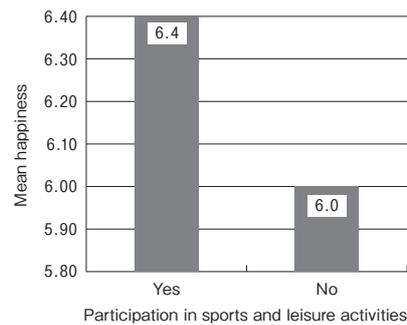


図18 Mean happiness and participation in sports and leisure



(表21) ということが、明らかになった。

そこで、このカテゴリーの結論としては、第1に男性の2倍近くの家事労働を荷い、工芸にもいそしみ、トータルの労働時間で、1時間18分も長い女性の幸福感の低さに注目しなければならない。

もし、女性のこれらの無償の労働時間を、金銭価値に換算するなら、国の経済活動に大きな

図19 Work hours vs. life quality

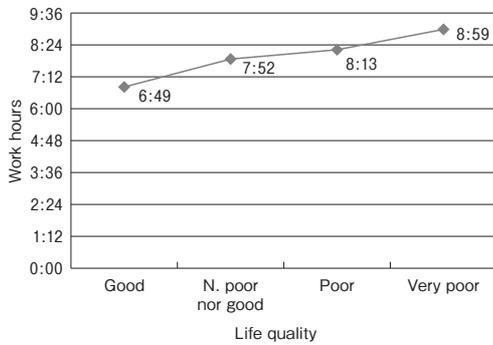


表21 Cross tab between work hour and mean happiness

Sex	Mean happiness	Mean work hours
Male	6.3	6 : 54
Female	6.0	8 : 12

貢献をしていることになり、それを考慮して、女性の経済的状況を改善する特別な政策が必要ということになる。

地方に住む人は、道路、交通機関の不備により、移動や待ち時間に多くをとられておりこれも幸福ではない。

時間の利用が幸福と大きくかかわっているということが、今後政策にとり入れられる必要があるということになる。

3.6 生活水準・所得¹²⁾

生活水準は、幸福の重要決定因子の1つである。この研究では、経済的生活水準と、回答者の幸福水準の関係をとらえ、非金銭的所得も、人々の幸福に影響していることを明らかにしている。

この調査では、論文の執筆者は6種類の副次的質問を入れたとしている。

- ① 世帯所得（親戚や隣人からの前年度に受けとった非金銭的所得も含む）。
- ② 同じ地域の他の世帯と比べての不平等感（大多数の世帯より富んでいるか、同じか貧しいか）。
- ③ 経済的安定度。
- ④ 家族全員の食料が足りているか。
- ⑤ 住宅の質（修理の必要性があるか）、部屋数。
- ⑥ 資源の保有（土地や家畜）。

（引用者注：このような副次的質問をリストアップした論文はこのカテゴリーのみであった。）

世帯所得の分布は、図20のように、最も低い年収25,000ニュルタム（約46,725円）以下が57%と大部分を占める。次いで25,001～50,000ニュルタムが15%で、100,000ニュルタム以上も同じく15%。

県別の世帯所得では、図21のように首都ティンプーが、とび抜けて高く332,300ニュルタムとなっており、あとの県は75,800以下となる。地域による所得格差が大きいことがわかる。

一人当たり所得も、図22のようにティンプーがずばぬけて多い。

所得に関する意見としては、図23のように“他人と同じ”（人並）が72%を占める（ティンプーをのぞいてはあまり大きな格差がないためと思われる）。

図20 Distribution of respondents by levels of their household income

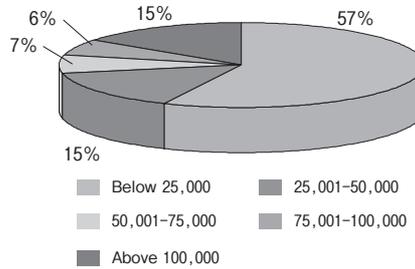


図21 Household income by dzongkhags

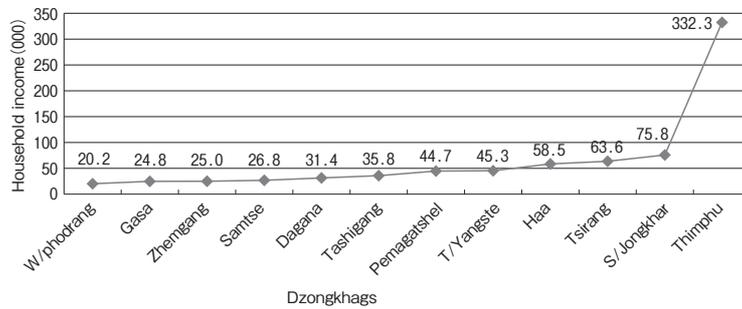
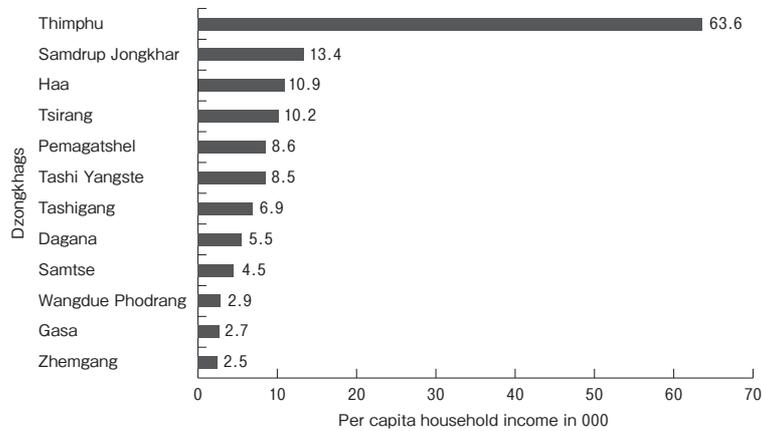


図22 Per capita annual income by dzongkhags



「経済的安定度」においては、図24のように、“ちょうど十分”が72%を占め、“十分でない”は16%に止まっている。ティンブー以外の地方では商業文化があまり発達していないし、自給自足で生活できるので、あまり不自由を感じないものと思われる。

食料が足りているとする率は図25のように97%あり、不自由している人は3%。貧困率が23.2%（2006年）でも97%の人が幸せという背景に、食料の不足がきわめて少なく、地方では自給自足でまかなわれているためと思われる。

住宅については、図26のように、1人1部屋が28%、2人1部屋が38%、3人1部屋が

図23 Distribution of respondents by perceptions on their income 図24 Distribution of respondents by financial security

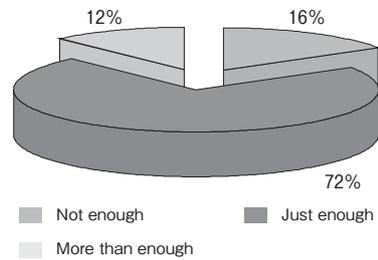
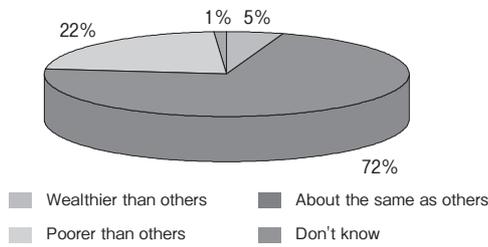


図25 Percent distribution of respondents by problems of food security

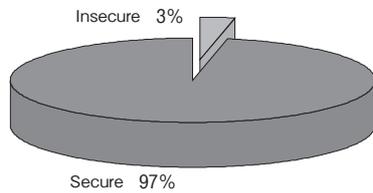


図26 Room ratio (>3 persons per room) by dzongkhags

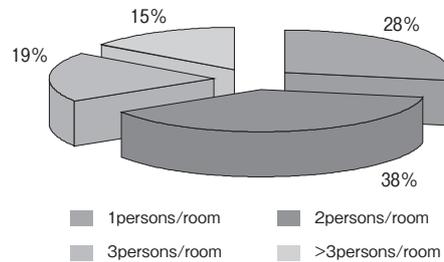
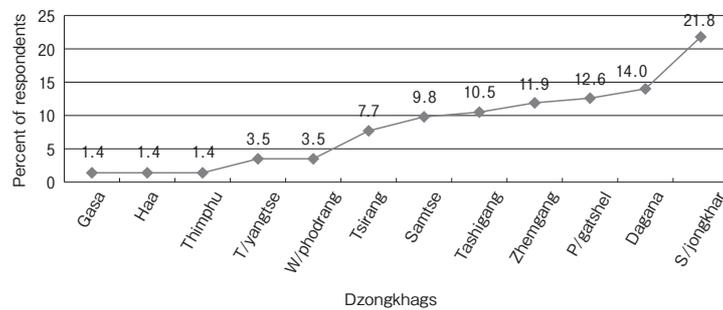


図27 Overcrowded housing (>3 persons per room) by dzongkhags



19%、1部屋3人以上が15%となっている。

また、最も都市化の進んだティンプーで、1部屋3人以上の割合が図27のように、1.4%と、最も少ないグループに入っている。ティンプーの住宅事情がこのように良いことに、正直驚きを感じる。

住宅の質については、図28のように、修理の必要がないが42%、小さな修理が必要は32%、大きな修理が必要が26%となっている。

また、図29のように、住宅の質の悪い率は首都ティンプーで最も少なく、ティンプーの都市化がスラム化などを生じていないと思われる。

またブータンでは、図30のように、家畜（にわとり、馬、牛、山羊、ろばなど）を所有している人が少なくない。しかも20頭以上所有している人が3人に1人（30.47%）にもものぼる。これをみると、ブータンの人達は金銭的より物質的に豊かであることがうかがえる。

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

図28 Distribution of respondents by quality of housing

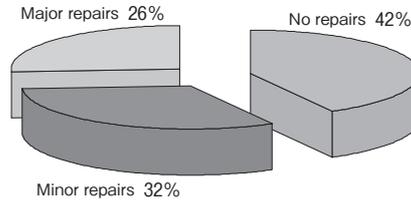


図29 Distribution of respondents living in poor quality of housing by dzongkhags

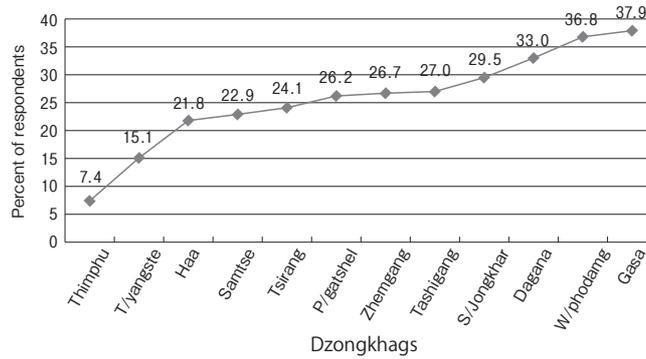


図30 Distribution of respondents by size of Livestock owned

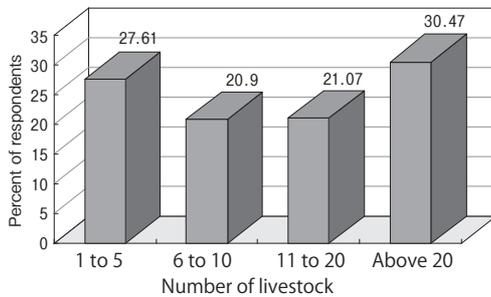
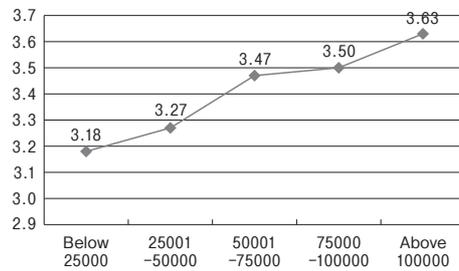


図31 Relationship between mean household income and quality of life



世帯所得と生活の質（幸福）は、図31のように、絵に画いたように、高所得ほど幸福度が高まる。

経済的充足と幸福の関係も図32のように同様である。

食料の充足度と幸福の関係も図33のように明らかである。

住宅の質と幸福の関係も、図34のように正比例している。

また住宅の質と、健康満足度の割合も、図35のように正比例である。

家畜の数と幸福との関係も図36のように正比例している。

調査対象の12県では、やはり、首都ティンブーの幸福度が最も高くなっている（図37）。

生活水準・所得の面では、図21のように、地域によって所得格差が大きいこと、特に首都ティンブーが、世帯所得面でも一人当たり所得でも断然高く、満足度や幸福感も最も高くでいて

Figure 32 Relationship between financial security and happiness

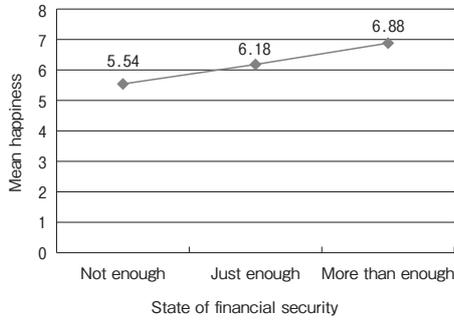


Figure 33 Relationship between food security and happiness

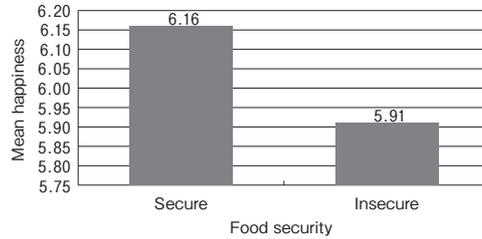


Figure 34 Relationship between quality of housing and happiness

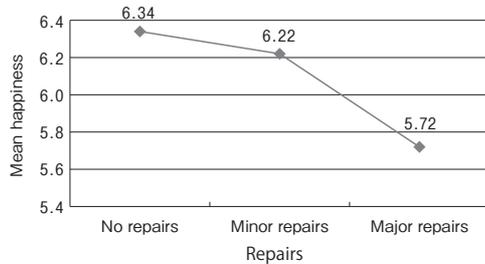


Figure 35 Relationship between quality of housing and health satisfaction

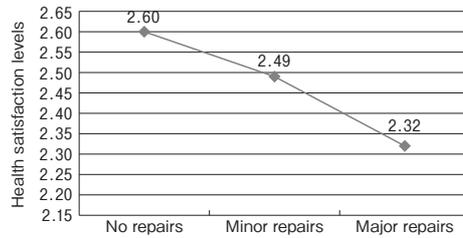


Figure 36 Relationship between no. of livestock and happiness

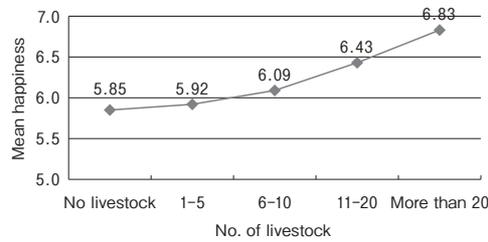
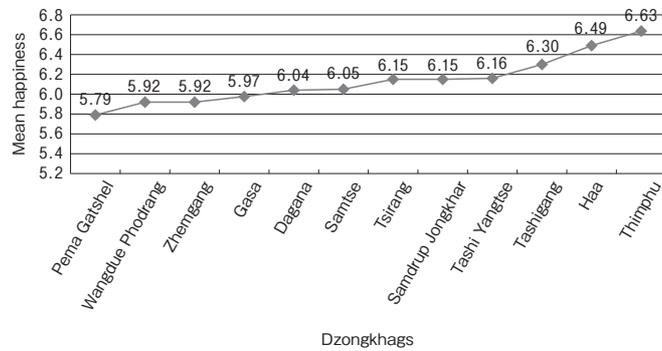


Figure 37 Mean happiness of respondents by dzongkhags



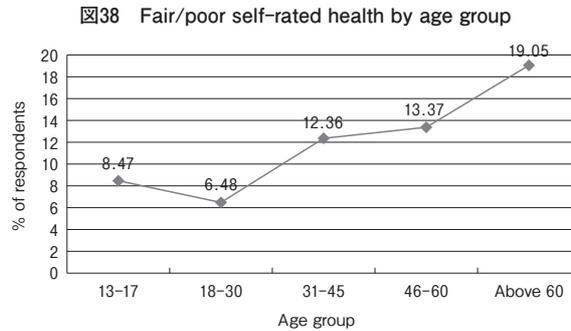
ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

る。このティンブーと他の地域との格差が、このまま温存されていくということは、ブータン人全体の幸福にとって問題がある。ブータンの伝統文化を守っているのは、地方であり、都市化とともに、伝統文化は都市から消えていくことは、「文化の多様性」でも明らかになっており、伝統文化にこそブータンのすばらしさが示されていることを思えば、早急な政策対応が望まれる。

3.7 人々の健康¹³⁾

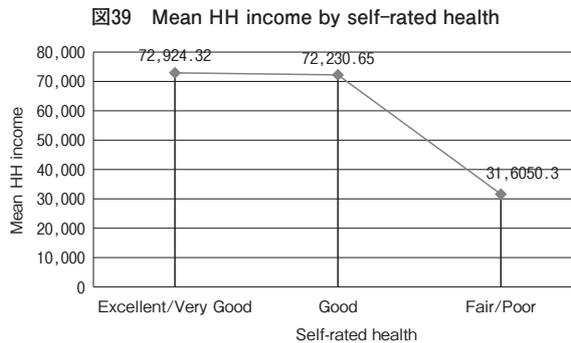
健康と幸福の増進は、多くの国の政策の究極的目標である。ブータン人の文脈では、幸福とは身体が健康で、精神的に悩み事がないことであるといえる。WHO の健康の定義でも、完全に身体的、精神的また社会的に健康であることであり、単に病気にかかっていないという意味だけではないとしている。

GNH 指標の中で健康カテゴリーは、個人の幸福や安寧に直結しているとして、まず、健康があまりよくない人は、年齢的に高齢者ほど多くなると図38で示している。



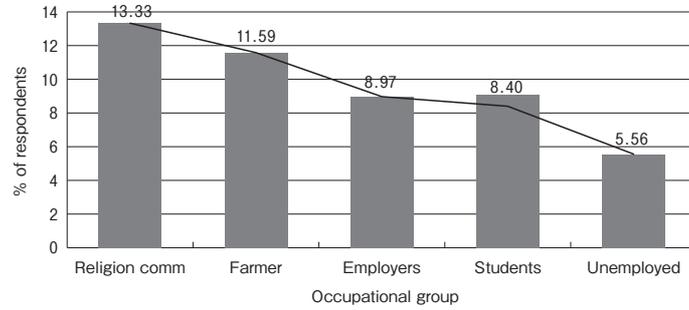
また、地方居住者の11.1%が、健康があまり良くないとしているのに対し、都市では、その比率は、6.9%と低い。これは、地方では悪条件のもとでの長時間労働や、医療の状況や、健康への知識も十分でないためであろう。

図39は収入と健康の関係で、健康状況のよくない人の世帯収入は低くなっている。



職業別にみると、図40のように僧院の人、農業従事者で健康状態が良くないことが示されている。

図40 Fair/poor self-rated health by occupational group

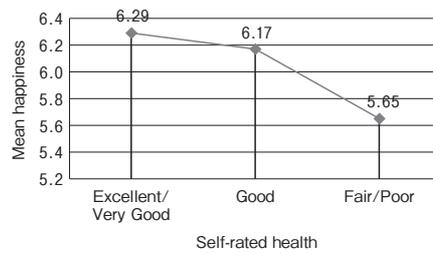


また、健康状況の良い人ほど、ボランティア活動をする率が高く（図41）、また幸福感も高い（図42）。

図41 Volunteer labour contribution by health status



図42 Mean happiness by self-rated health



長期の病気をわずらっている人は、年齢が高いほど（図43）、職業別では農業従事者（図44）、所得別では、低所得の人ほど（図45）、ストレスのレベルの高い人ほど（図46）、多くなっている。

長期の病気の有無と、幸福度の関係は、いうまでもなく、病気がない人の幸福度の方が高い（図47）。

年齢別の健康な日数は、図48となり、高齢者ほど健康な日数は少なくなる。職業別では、図49

図43 Long-term disability by age group

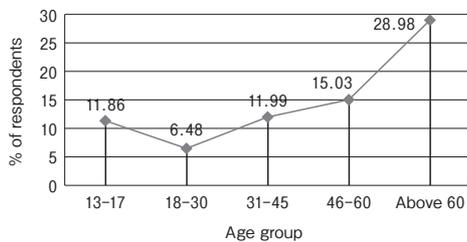
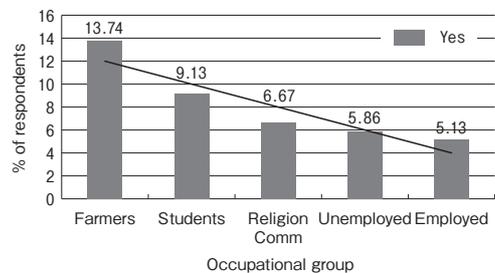


図44 Long-term disability by occupational group



ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

図45 Long-term disability by HH income

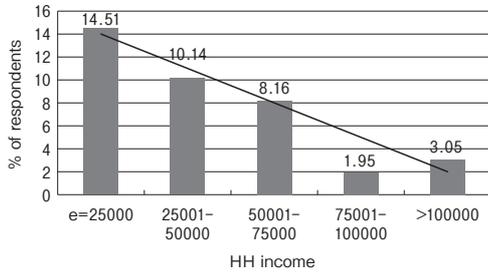


図46 Long-term disability by stress level

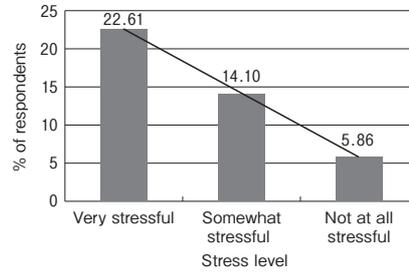


図47 Mean happiness by Long-term disability

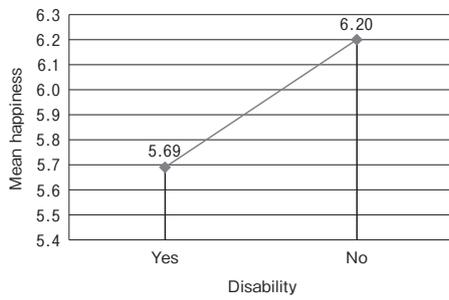


図48 Mean healthy days by age group

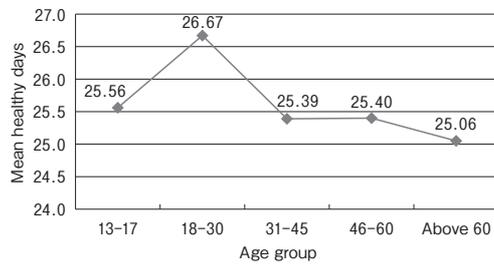


図49 Mean healthy days by occupational group

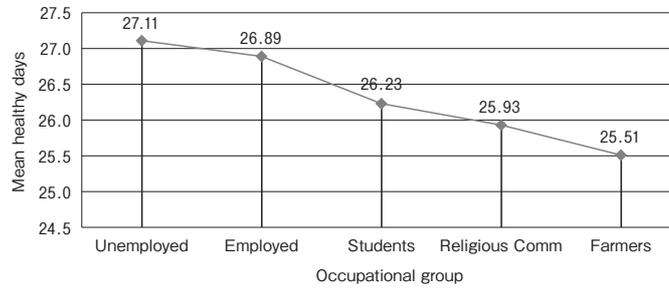
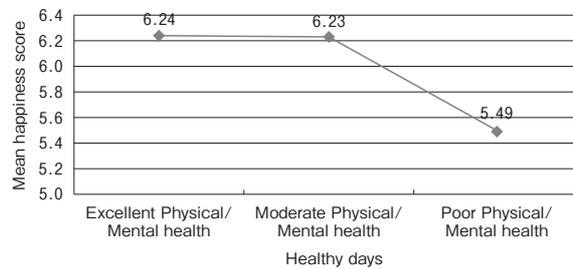


図50 Mean happiness by healthy days



のように、農業従事者や僧院の人達の健康な日数は、少なくなっている。
また、健康な日々の長い人ほど、幸福度が高い(図50)。

次に日本の内閣府の「幸福に関する研究会報告（案）」（2011年8月29日）のp. 24の図表14でも少しとり上げているが、自殺願望があるかどうかを聞いている。男女別では、何と女性の自殺願望が男性より高く（図51）、年齢的には、若い世代（13～17歳、および18～30歳）で自殺を思い立ったことがある率が高い（図52）。

また、図53のように、地方より都市部の方が自殺を思い立った率が高くなっている。

図51 Suicidal ideation and attempts by gender

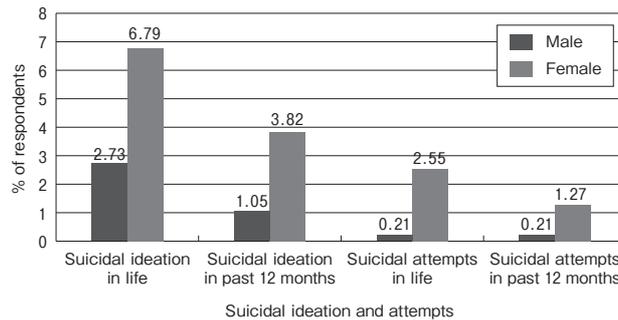


図52 Suicidal ideation and attempts by age group

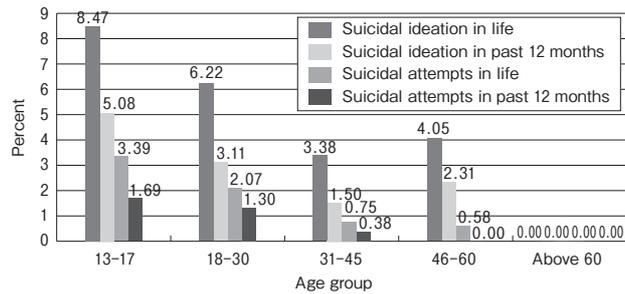
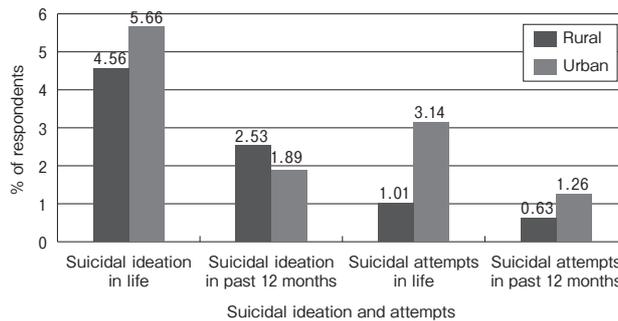
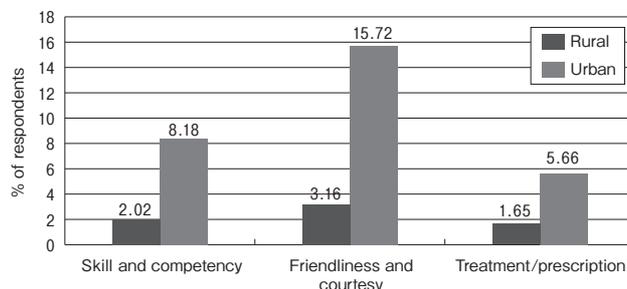


図53 Suicidal ideation and attempts by area of residence



次に、病院のヘルスケアの対応の不満については、都市部の方が地方より高く、とくに、応対の友好性やていねいさや技術や力量、扱い方で都市部の不満が高い（図54）。都市部の方が良いケアが受けられると思いきや意外である。

図54 Dissatisfaction with different health care services by area of residence



まとめると、男性の方が女性より健康度が高いというジェンダーギャップ問題、都市部の方が地方より健康度が高く、富んだ人の方が貧しい人より健康度が高く、職業別には僧院の人と農業従事者の健康度が低い。

健康な人はボランティアにも熱心で、幸福度も高いと出ている。

また率直な自殺願望への質問に、女性の方が、男性より高く出ており、ジェンダーギャップ問題は、健康の領域でも根深いことがわかる。

3.8 良き統治¹⁴⁾

「我々の責務は、第一に、何をおいても、国の平和と平穏を実現する統治であり、GNH のビジョンの完遂であり、新しい統治システムとしての民主主義の強化である」と第5代、ジグメ・ケサル・ナグメル・ワンチュク現国王は、王位継承の日の2006年12月17日に宣言している。

GNHはジグメ・シンゲ・ワンチュク第4代国王（在位1972～2006年）が、16歳で即位して間もなく、ブータンはヒマラヤの貧しい小国でGNPは小さいかもしれないが、GNHでは、どこにも負けない国にできると発想し、1976年12月、21歳のときコロンボでの非同盟諸国会議のあとの記者会見で「Gross National Happiness is more important than Gross National Product」と発言してGNHが国際的に発信されることになった。そして、貧困率23.2%（2006年）でありながら、97%が幸福（2005年国勢調査）と答える域に達した頃、GNHの最後の仕上げに、王政を廃止して立憲議会制民主主義国への変換をなすとげ、2008年7月18日にGNHを国是とうたった新しい憲法も発効した。

まさに、かつて、「最大多数の最大幸福」の提唱者ジェレミ・ベンサム（1748～1832）が「最大多数の最大幸福の実現には代表制民主主義しかありえない¹⁵⁾」といった（1822年）言葉そのままに第4代国王のGNHの最後の仕上げは民主主義であった。

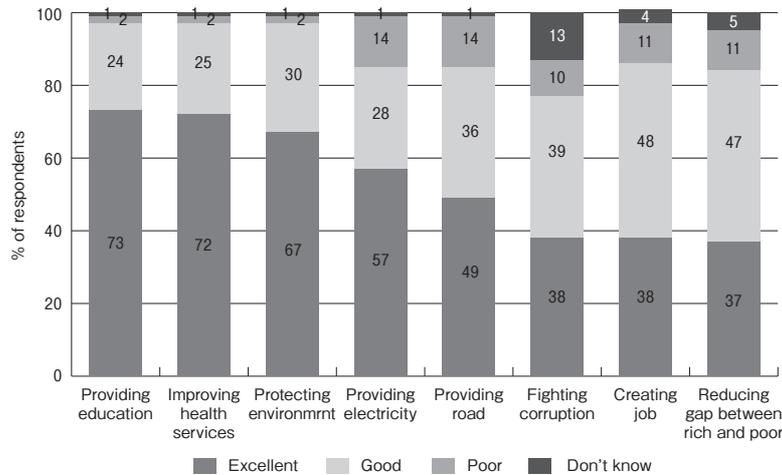
“良き統治”の категорияはこのようにブータンの国の存立と深くかかわっており、数値でとらえるのがむずかしいところではあるが、このcategoryの執筆者は、GNHの「良き統治」を、次の4分野に分けた。①効率的統治、②民主主義の文化、③制度とリーダーへの信頼、④退廃（汚職）の根絶、とした。またこのcategoryは、他の8categoryをも横断的にカバーするものであり、ブータン憲法第9章にうたわれたGNHの完遂をめざすものでもあるとしている。

最初に、図55にみる、過去12か月間の中央政府の成果については“すばらしい”は「教育」がトップで73%、「医療サービスの改善」は2位で72%、「環境保護」は67%、「電力の供給」は57%と、以上が50%を越えている。「道路」が“すばらしい”が49%、「汚職との戦い」が

38%で“やや良い”の方が多く、39%。「雇用の創出」も“すばらしい”は38%で“やや良い”が48%となっている。

「貧富の格差を縮小する」は、“すばらしい”が37%で、“やや良い”が47%であった。「電力の供給」と「道路」は、“貧困”（十分でないこと）がそれぞれ14%。「汚職との戦い」は“貧困”が10%で、“わからない”が13%。「雇用の創出」と「貧富の格差を縮小する」は“貧困”がそれぞれ11%となっていた。

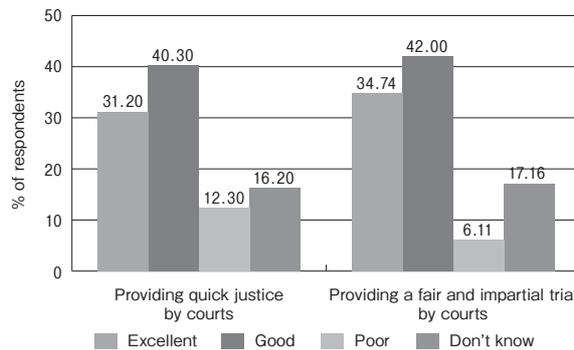
図55 Performances of central government in the past 12 months



次に裁判所の効率については、図56のように、「法廷による迅速な裁定があった」とする率では、“すばらしく迅速であった”が31.20%、“かなり迅速であった”が40.30%と、合計71.50%で、おおむね満足されていた。

「法廷が公平で偏らない裁判をした」は、“すばらしい”が34.74%、“かなり”が42.00%で、これも合計76.74%がおおむね満足していると出ている（図56）。

図56 Performance of judiciary



次に国家評議会（National Council上院）と国民議会（National Assembly下院）の選挙（ち

ブータンの第2回GNH（Gross National Happiness：国民総幸福）調査結果にみる「幸福立国」の実態

なみに、上院の選挙は2007年12月に、下院の選挙は2008年3月に行なわれた）については、図57のように登録した投票者は、31万8465人。投票した人は、上院165,962人、下院253,012人となっている。

なお、女性の投票者数は161,169人で、男性の投票者数157,296人を上回っている。

図57 Final results of National Council election (NCE), 2007 & National Assembly election (NAE), 2008

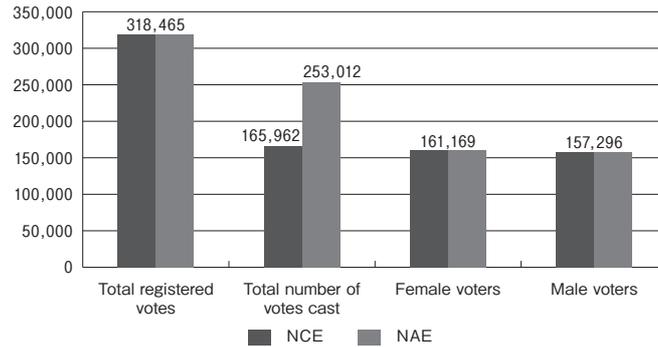
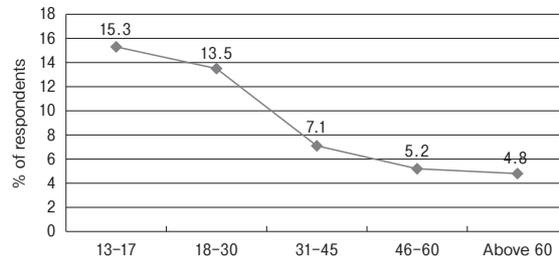


図58は、年齢別、選挙が自由で公正でないとする率である。年齢が若いほど選挙が自由で公正でないとする率が高くなっている。ちなみにブータンでは選挙権が18歳以上で、被選挙権は25～65歳となっている。

図58 Age vs perception of election as not free and fair



基本的人権についての受けとめ方は、図59のように、“差別からの自由がない”が最も多く10.7%、“発言や言論の自由がない”が8.5%、“公的行政サービスへ、平等にアクセスする権利がない”が7.4%。“同一労働同一賃金の権利がない”5.6%、などとなっていて、おおむね10%以下であり、基本的人権が満たされていないと感じている人は少数派といえる。

図60は、国の制度に対する信頼感で、“信じている”率は「警察」で29.7%、「法廷」で21.9%、「県の行政」で20.3%、「地域の行政」で19.7%、「中央政府」で19.3%、「メディア」で18.7%となっている。“信じていない”とする率はいずれも数%でごく少数である。

図61は、学歴と制度を信じない比率を出している。大学卒以上で「メディア」を信じないが12.3%。「警察」を信じないが10.8%あるのと、8年制教育を受けた人で、「警察」を信じないが10.4%ある以外は、いずれも10%未満の数%に止まっており、反体制的な人はごく少ないと思われる。

図62は、世帯年収別に、「法廷」、「警察」、「メディア」をいくらか信じるとする割合を示し

図59 Perception of fundamental rights

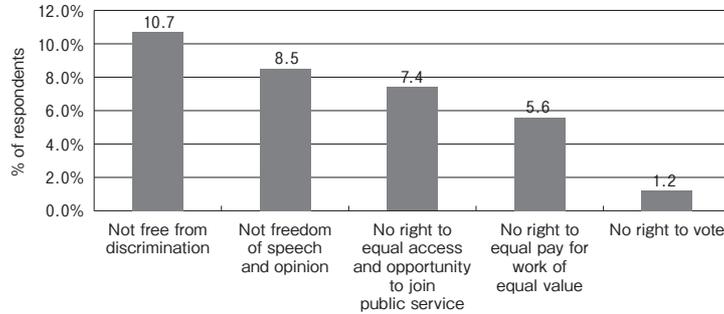


図60 Trust in institutions

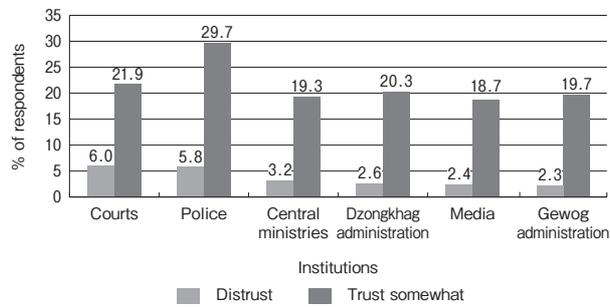
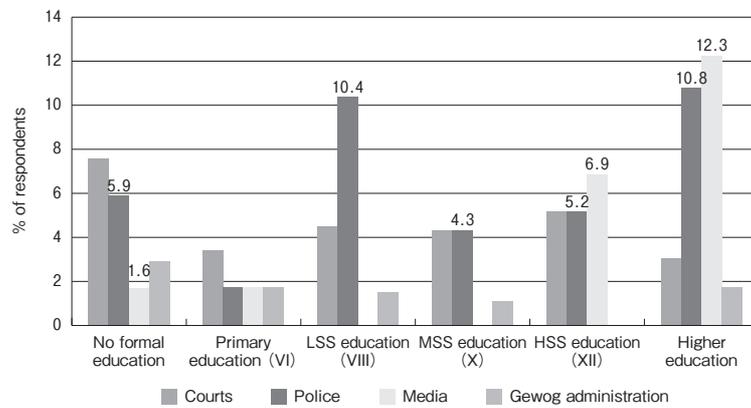


図61 Educational qualification vs distrust in institutions



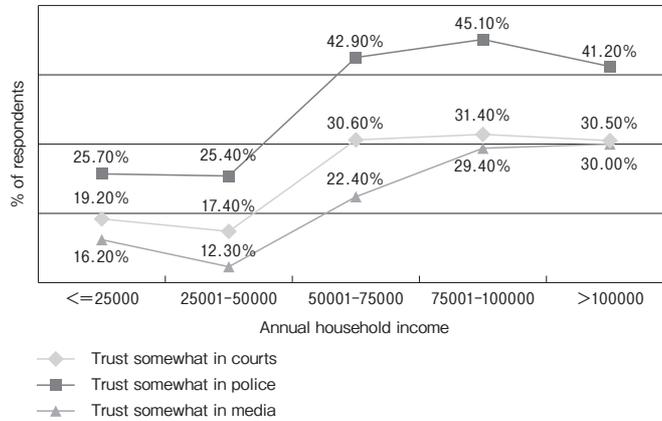
ており、年収が50,001~75,000ニュルタムから、75,001~100,000ニュルタムあたりが、信じる率が高く、100,000以上でも、低所得層より信じる率は高くなっている。

このカテゴリーの筆者は、以上の調査結果について、次のような所見を述べるに止めている。

統治に関する問題を緩和するため、次のような政策介入を提言するとして、各自治体は人口、環境、貧困の改善など地域で異なる発展の優先順位があり、住民の教育水準や、所得、土地所有、道路へのアクセスなどを考えて多次的に資源配分をする必要があるとしている。

議会制民主主義の狙いからみて、地方分権的視点が必要であり、行政のキャパシティや人材

図62 Annual household income vs trust somewhat in institutions



に限界がある場合には、予算の移転などが課題となる。

また、ブータンでは失業率が高まっており、2004年の2.5%から2006年の3.2%へと上昇。とくに15歳～24歳で深刻で、15歳～19歳で6.5%、20歳～24歳で11.4%（2006年労働力調査）となっており、地方の若者には、仕事に必要な教育カリキュラムを用意する必要があるとしている。

裁判に関しては、一年間に平均に757件が、早い判定を出すという面で問題があり、349件が公正な判定でないとするなど、裁判の独立性の強化が必要だとしている。裁判を受け入れやすくすることと迅速性が求められる。

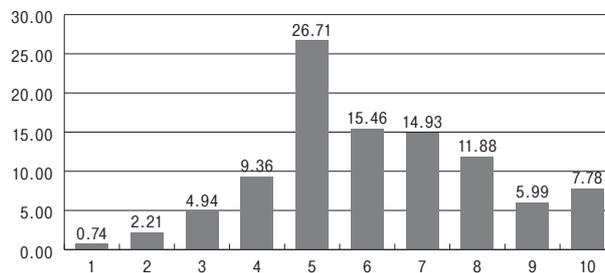
以上のように政策提言というより、分析をしている。

3.9 精神面の幸福¹⁶⁾

最後のパートは、ブータン人の幸福の真髄、「精神面の幸福」ということで、スピリチュアルライフが浮き掘りにされている。

まず、ブータン人の幸福のレベルは、10を満点として6.15。図63のように、5が最も多いが、4以下は少数で6以上に多くの幸福感が集まっている。

図63 Happiness level



ブータン人自身の判定では、生活満足度は、表22のように、「非常に良い」「良い」が計37.79%。「良くも悪くもない」が最も多くて51.16%。「貧弱」は「非常に貧弱」を入れて計

11.06%であった。ブータン人の大半は、安定した精神状態にあるが、とくに約4割の人達は非常にハッピーな精神状態をエンジョイしている。

表22 Quality of life

Quality of life	Percentage
Very good	4.32%
Good	33.47%
Neither good nor poor	51.16%
Poor	8.53%
Very poor	2.53%
Total	100%

表23のように、「人生を楽しんでいる」人が、“とり分け楽しんでいる人”（7.78%）と“かなり楽しんでいる人”（58.99）を合わせて66.77%にもなり“少し楽しんでいる人”31.55%を入れると98.32%となり“全く楽しんでいない人”は1.68%でしかない。

表23 Life enjoyment

	Frequency	Percentage
An extreme amount	74	7.78
Quite a lot	560	58.99
A little	300	31.55
Not at all	16	1.68
Total	950	100

このようなブータン人のスピリチュアルな幸福感はどこからくるのであろうか。

表24のように「お祈りをする」率が“毎日”が38.41%、“時折”が48.57%もある。“全くお祈りをしない”率は13.02%にすぎない。

「瞑想する」率は“毎日”が1.37%、“時折”は8.23%、“全くしない”は90.4%。

「お寺参りをする」率は、“毎日”が2.95%、“時折”が93.57%。お寺参りは日常的になっているようだ。

「子供達とスピリチュアルなテーマについて会話することがあるか」については、“毎日”が12.21%、“時折”は47.53%、“全くしない”は40.26%に止まっている。「毎日の生活の中で（仏教）の“業（ごう）”を感じることはあるか」については、“常に”が45.01%、“時折”が52.05%、“決して感じない”は2.94%に止まっている。

これだけみても、ブータン人のスピリチュアルライフが、かなり深いことがわかる。

そして、表25のように、お祈りのお経をあげる頻度の高い人ほど「幸福」レベルは高いのだ。

「健康状況」（GHQ: General Health Questionnaire）については、表26のように“正常”が85%、“いくらか精神的悩みあり”が10%、“いくつかの精神的悩みあり”が5%。

「自己申告による精神状況」は表27のように“良好”が39%、“普通”が61%、“最悪”が0%となっている。

「ブータン人が感じているポジティブな感情」としては、表28のように、“穏和さ”（しばし

表24 Spirituality

Sl. no.	Spirituality	Frequency	Percentage
1	Do you recite prayers:		
	Daily	363	38.41
	Occasionally	459	48.57
	Not at all	123	13.02
	Total	945	100
2	Do you practice meditation:		
	Daily	13	1.37
	Occasionally	78	8.23
	Not at all	857	90.4
	Total	948	100
3	Do you visit local temples and places of spiritual significance:		
	Daily	28	2.95
	Occasionally	887	93.57
	Not at all	33	3.48
	Total	948	100
4	Do you discuss spiritual issues with your children:		
	Daily	84	12.21
	Occasionally	327	47.53
	Not at all	277	40.26
	Total	688	100
5	Do you consider Karma in the course of your daily life:		
	Always	428	45.01
	Sometimes	494	52.05
	Never	28	2.94
	Total	950	100

表25 Frequency of prayer recitation by Mean happiness level

Sl. no.	Frequency of prayer recitation	Mean happiness level
1	Daily	6.16
2	Occasionally	6.15
3	Not at all	6.12

ばと、時折を含めて) 75.53%ときわめて高い。“思いやり”(同)は89.78%。“寛容さ”(同)は、82.65%。“心の安らぎ”(同)、79.16%。“寛大”(同)、90.33%。

ブータン人が、きわめて心穏やかで、寛大な人達だということが示されている。

では、ストレスなどは全く感じないのであろうか。表29は、ブータン人の「ストレスレベル」を示している。“全くストレスなし”が約半数の47%。“いくらかストレスり”が41%。

表26 GHQ

Sl. no.	GHQ levels	Percentage
1	Normal mental wellbeing	85%
2	Some mental distress	10%
3	Severe mental distress	5%

表27 Self reported spiritual level

Sl. no.	Level of spirituality	Percentage
1	Very	39%
2	Moderately	61%
3	Not at all	0%

表28 Positive emotions

Sl. no.	How often have you felt the following emotions?	Often	Sometimes	Never	Total
1	Calmness	16.67%	58.86%	24.47%	100%
2	Compassion	27.29%	62.49%	10.22%	100%
3	Forgiveness	20.93%	61.72%	17.35%	100%
4	Contentment	17.65%	61.51%	20.82%	100%
5	Generosity	28.71%	61.62%	9.67%	100%

表29 Self reported stress levels

Sl. no.	Stress levels	Percentage
1	Very stressful	12%
2	Somewhat stressful	41%
3	Not at all stressful	47%

“非常にストレスあり”が、約10人に1人強の12%となっている。

ブータン人もネガティブな感情をもつことがあるようだ。その内容は、表30のようだが、しばしばネガティブな感情（怒り、罪深さ、利己主義、嫉妬、失望、悲しみ、フラストレーション）を感じる率は、数%しかない。最大でも“悲しみ”の6.53%どまり。“決して感じない”は、“嫉妬”の79.07%を筆頭に、最も少なくとも“怒り”の26.60%である。

ブータン人の幸福感はどこから来るのか。図64のように、「人生の満足」を、主な4つの分野から見ると、“家族関係”が最大で90%。ブータン人の家族への思いやりと、家族の生み出すやさしさや助けあいなどが、幸福感や満足度のベースになっていることが分かる。

2番目が“主な職業からの満足”（63%）、3番目が“健康”（58%）で、“経済的安定”の満足度は最も少なく、29%に止まっている。発展途上国ブータンには、先進国にはない、心の豊かさ、幸福感が満ちているが、経済的安定がもう少しあれば——ということも本音なのであろう。

ブータンの第2回 GNH（Gross National Happiness：国民総幸福）調査結果にみる「幸福立国」の実態

表30 Negative emotions

Sl. no.	How often have you felt the following emotions?	Often	Sometimes	Never	Total
1	Anger	6.31%	67.09%	26.60%	100%
2	Guilt	4.63%	44.27%	51.10%	100%
3	Selfishness	2.63%	23.66%	73.71%	100%
4	Jealousy	1.37%	19.56%	79.07%	100%
5	Disappointment	6.01%	58.38%	35.62%	100%
6	Sadness	6.53%	55.16%	38.32%	100%
7	Frustration	4.63%	55.52%	39.85%	100%

図64 Life satisfaction

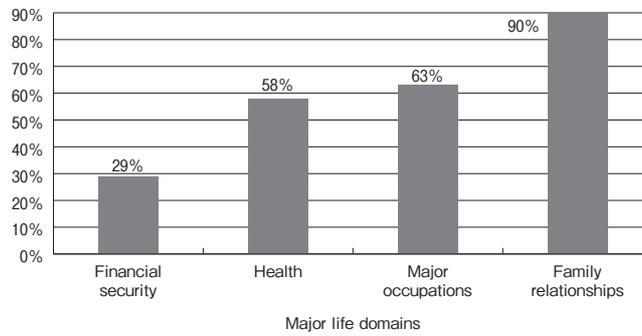


表31 Mean happiness level by gender

Gender	Mean happiness
Male	6.2547
Female	6.04449

図65 Life quality by gender

1	Very poor
5	Very good

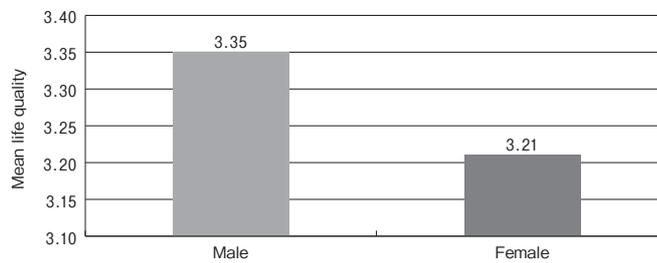


图66 Life quality by employment status

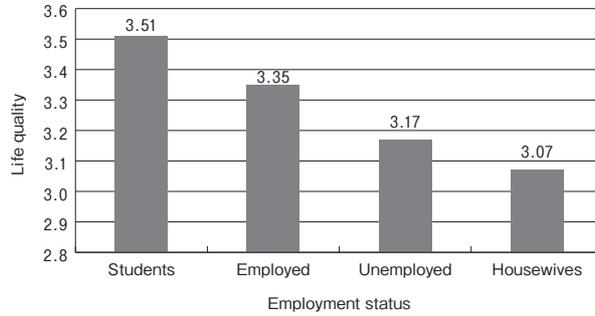


表32 Dzongkhag by Mean happiness level

Dzongkhag	Mean happiness level
Pema Gatshel	5.79
Wangdue Phodrang	5.92
Zhemgang	5.92
Gasa	5.97
Dagana	6.04
Samtse	6.05
Tsirang	6.15
Samdrup Jongkhar	6.15
Tashi Yangtse	6.16
Tashigang	6.30
Haa	6.49
Thimphu	6.63

表33 Negative emotions by dzongkhag

Sl. no.	Dzongkhag	Mean negative emotion value
1	Gasa	1.83
2	Haa	1.85
3	Tsirang	1.87
4	Tashigang	1.93
5	Zhemgang	2.02
6	Pemagatshel	2.11
7	Tashi Yangtse	2.14
8	Samdru Jongkhar	2.21
9	Samtse	2.23
10	Dagana	2.33
11	Wangdue Phodrang	2.47
12	Thimphu	2.65

ブータンの第2回GNH（Gross National Happiness：国民総幸福）調査結果にみる「幸福立国」の実態

最後に幸福立国ブータンの最大の課題、ジェンダー問題。

表31のように、ブータンの男女別幸福度は、男性の方が高く（6.2547）、女性（6.04449）の方が低い。

また「生活の質」も図65のように、女性の方が貧困である。職業別にみた「生活の質」は、図66のように、“主婦”が最も低くなっている。

また、首都ティンブーは、経済的に豊かになり、幸福感で全島のトップだが（表32）、「ネガティブな感情」（この内容は、表30にあり）では表33のようにティンブーが最も高く出ている。都市化が進むことのデメリットが出ているものと思われる。

以上が精神面の幸福の概要である。

4. 第2回GNH調査結果にみるブータンの現状とこれから

4.1 ボランティア、ドネーションをする率が高いほど幸福感は高い

ブータンは発展途上国でありながら、所得貧困レベルが23.2%（2006年）と高くても、チベット仏教カーギュ派の教えが世代を超えて深く浸透しているため、「互助・互恵」（言いかえると“ボランティア”と“ドネーション”＜寄付＞）で、先進国を上回る助けあいが行なわれ、高い幸福感を維持している。またボランティア活動やドネーションをする率が高いほど、幸福度が高いことが実証されている（表5、表6）。

4.2 アジア的、人との絆、「ディグラム・ナムザ精神」

また家族のつながり、家族生活を大変大事にし、人生の目標で大切なもののトップが“家族生活”（表12）であり、生活満足度で最も大きな位置を占めるのが“家族関係”（図64）である。この人と人との絆、つながりは、家族から地域社会、職場、学校でも重要視され、それが「ディグラム・ナムザ精神」であり、ブータン社会のセーフティネットになっている。ブータン人自身も「ディグラム・ナムザ精神」を重要と93.7%が考えており、また、過去12か月でより強まっていると61%が考えている。

こうした、仏教的、アジア的価値観が、地域、職場、学校での助けあいを強め、単なる所得貧困だけでは判断できない、人々の幸福感を生み出しているといえる。

4.3 自然と共生、地域の民話の語り継ぎ

GNHの9指標のうち、「環境」の項をのぞく、8指標についてレポートが出ているが、他の項目、例えば「教育」の中で、図11に示したように、“教育を受けた年数が長くなるほど環境知識が低い”となっているが、ここでの環境知識とは、“動植物の名前を知っている”、“毎年ある一定の時期、山に入らないというルールを知っている”などで、学校教育では教えていないが、地域の人々が大切にしている知識である。

また「民話の語り継ぎ」（表18）という文化の伝承もブータン人が大切にしていることだ。

4.4 ブータン人の Spirituality（精神性）

特にブータン人の特性を浮き上がらせているのは、「Spirituality」（精神性）（表24）である。お祈りを毎日、または時々する人が86.98%もある。そして、お祈りのお経を上げる人ほど、幸福感も高い（表25）。この辺が単に物に恵まれているだけの先進工業国の人間と大いに異なる、ブータン人の精神性、心の持ち方を豊かにしているのではなからうか。

4.5 今後の問題点

i) ジェンダーギャップの大きさ

ところで問題の1つは、第1回GNHフィージビリティ調査で、報告書をまとめた、サビーナ・アルカイア博士らの論文でも説明されていたジェンダー問題である。“女性はけがれている”(図5)といった迷信が、信じられ、しかも女性の方がそう信じこまされている率が高い(図6)ことである。

ただ、“教育は、女性より男性の方が重要”には、80.5%が反対しており、いくらか救われる。

また図13、図14で示したように、女性は、家事労働をするために、男性より労働時間が長く、表21(図65、図66)のように、女性の方が男性より幸福感が低い。

また、更に悪いことには、図51のように自殺願望で、男性より女性の方が高い。

この問題の解決には、GNHの9項目に、「ジェンダー」を加え、女性のかかえている現状をよく直視し、解決方法を具現化していく必要がある。筆者は、2009年9月2日にジグメ・イエゼル・ティンレイ首相が、東京の、日本外国特派員協会で講演されたとき、質問の時間に「GNHの9カテゴリーに、“ジェンダー”を加えて10カテゴリーにしてはどうか」と聞いてみた。その時の答えは「ブータンは完全に男女平等であるから、その必要はない」であった。しかしこの現状、とくに自殺願望(図51)が男性より女性で高いということなど、早急にとり組むべき課題ではないだろうか。

ii) 発展の中で失われていくものをどう補完していくのか政策が必要

次に、非常に重要なことだが、ブータンは、これから発展していく過程で、様々な変化をよぎなくされていく。すでにその萌芽は、GNH第2回調査からもうかがえる。

例えば「地域の民話の重要性」(表15)なども、地方で高いが、都市部で低い。「ボランティア活動」(表1)も「寄付」(表2)も地方で高く、都市部で低い。「地域社会に所属している意識」(表8)は、高齢者になるほど高く、若い年齢層で低い。

学校教育のレベルが上がるほど“生活満足度”(図8)、“人生を楽しむ”(図9)度合いは上がるが、一方で、地域社会の自然や環境への知識は低下していく(図11)。

首都ティンブーは、所得や住環境で、地方よりすぐれており、多くの指標で幸福度が12県中最も高い(例えば図37)。ところが都市化が進むほど弊害も出てくるが、例えば、表10のように、“めったに安全でない”とする率は、ティンブーが21.6%で12県中最も高くなっている。

また、表32のように、“幸福水準”は12県中最も高いのがティンブーであるが、表33の“ネガティブな感情”(怒り、罪深さ、利己心、嫉妬、失望、悲しみ、欲求不満)では、ティンブーが12県中最も高い。

これからのブータンの経済発展、都市化の進行が、今回の調査でみた、ブータン文化のもつ良い面を薄れさせていき、都市化の弊害、世代間の文化格差などを生んでいくのではないかと危惧させる。

この点について、ブータンをこれからどういう方向に進めていくか、GNH委員会の元締ジグメ・イエゼル・ティンレイ首相あたりが、この調査結果をつぶさに分析し、進むべき道を正しく選択し、国民との合意を形成していくことの必要性が痛感される。

(東北大学大学院客員教授)

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

(謝辞) ブータンのGNHに関する解説や資料収集に、上村昌司麗澤大学准教授に大変お世話になった。記して謝したい。

注

- 1) His Excellency Lyonpo Jigmi Y. Thinley, 1998, Values and Development: "Gross National Happiness" Text of the Keynote Speech Delivered at the Millennium Meeting for Asia and the Pacific, 30 October~1 November 1998 Seoul, Republic of Korea
- 2) Sabina Alkire, Maria Emma Santos, and Karma Ura, 2008, Gross National Happiness and Poverty in Bhutan: Applying the GNH Index Methodology to explore Poverty
<http://www.ophi.org.uk/subindex.php?id=publications0>
- 3) ・大橋照枝、2010、『幸福立国ブータン——小さな国際国家の大きな挑戦——』白水社
・大橋照枝、2010、ブータンのGNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) の算出手法とHSM (Human Satisfaction Measure : 人間満足度尺度) のVer. 6の開発、RIJES Vol. 18, No. 2
・大橋照枝、2010、ブータンのGNH (国民総幸福) 国家経営に学ぶ——日本の小規模自治体でもとり組める——、マネジメント・ジャーナル第3号、神奈川大学国際経営研究所
・大橋照枝、2011、『幸せの尺度——「サステナブル日本3.0」をめざして——』麗澤大学出版会
- 4) i) Edward B. Barbier, 1987, The Concept of Sustainable Economic Development, Environmental Conservation Vol. 14 (No. 2) Summer 1987, pp. 101-110
ii) John Elkington, 1997, Cannibals with forks-The Triple Bottom Line of 21st Century Business, New society Publishers. pp. 69-96
- 5) 2) の p. 2
- 6) *ibid.* p. 17-19
- 7) *ibid.* p. 16
- 8) Sangay Chopel, Community Vitality
- 9) Sangay Chopel, Cultural Diversity and Resilience
- 10) Karma Wangdi, Education indicators
- 11) Karma Galay, Time Use and Happiness
- 12) Karma Galay, Standard of Living and Happiness
- 13) Karma Wangdi, Health Indicator
- 14) Phuntsho Raptan, Good Governance and Gross National Happiness
- 15) 戒能通弘、2007、『世界の立法者、ベンサム』日本評論社、p. 183
- 16) 著者不明、Psychological wellbeing

8)~16) (15) をのぞく) の出典 : <http://www.grossnationalhappiness.com/>

Summary

The reality of Gross National Happiness of Bhutan from the second GNH
feasibility research

Terue Ohashi

Bhutan is very small Himalayan country with 680 thousand Population.

The fourth king Jigme Singye Wangchuck (reign: 1972~2006) declared "Gross National Happiness is more important than Gross National Product" after the Conference of Nonaligned Countries in 1976 at the age of 21 years old.

After that, GNH is the strategic target of Bhutan., and included as national policy in the new constitution.

GNH has 4 strategic area.

1. Economic self-reliance

2. Environmental preservation
3. Preservation and promotion of culture
4. Good governance

And GNH is made up of 9 categories.

1. Community Vitality
2. Cultural Diversity and Resilience
3. Education
4. Time Use and Balance
5. Living Standard (income)
6. Health of the Population
7. Good Governance
8. Psychological Wellbeing
9. Ecological Diversity and Resilience

Twice feasibility research of GNH was conducted: first was done from September 2006 to January 2007 in nine prefectures with 350 samples, and second was from December 2007 to March 2008 in 12 prefectures with 950 samples.

And third was in 2010.

First research was summarized by Dr. Sabina Alkire, Maria Emma Santos, and Dasho Karma Ura in 2008.¹⁾

I, the author introduced the thesis in several paper. The outcome of second research was summarized to 8 paper (as 8 category of GNH, except environment category) by the researchers of Centre for Bhutan Studies.

This paper summarize the 8 paper and predict the present and future Bhutan.

Bhutan is a developing country with it's 23.2% poverty people. But 97% of the Bhutanese people answered "happy" at the census in 2005.

The reason why even the poor people feel happy, is that in Bhutan people exchange volunteer help and donation, so help each other. It comes from Buddhism that all Bhutanese from young generation to old people embrace.

The Percentage of voluntary help of Bhutanese is 51.9%: larger than 36.1% of Japan (2009), 88.7% of Bhutanese donate by money or good, larger than 34.0% (2009) of Japanese donation.

And the important finding is the people who do voluntary help and donation is happier than the people who do not do voluntary help and donation.

Particularly, Bhutanese often say *Driglam Namzha* (etiquette and code of conduct) that in family or school or office, people tie each other and it works as safety-net of society. 93.7% of Bhutanese answered *Driglam Namzha* is very important.

The most important of life goals of Bhutanese is Family life (95.1%), Responsibility (91.8%), Career Success (90.3%), Spiritwal Faith (87.7%), Financial Security (87.5%), So,

ブータンの第2回 GNH (Gross National Happiness : 国民総幸福) 調査結果にみる「幸福立国」の実態

Bhutanese think most important family life and financial security is fifth importance.

Bhutanese think importance the spiritual life. 38. 41% of Bhutanese recite prayers daily, 48. 57% recite prayers occasionally.

And the people who recite pray daily is happier than occasionally recite people.

<Some issues of future of Bhutan>

① Delay of gender equality.

Women work more hours than men, because women cover all housework and craft related activities and so on. So, women is less happier than men.

Gender gap of happiness is first priority of GNH.

② Urbanization and progress of economy weaken the traditional culture of Bhutan.

Volunteer activity and donation is most important for Bhutanese happiness.

But Urban people less perform such activity than rural people.

And younger people have less interest Bhutanese traditional culture than older people.

Such issues should be taken into consideration by GNH commission, especially the top the Prime minister Jigmi Y. Thinley.

1) Sabina Alkire, Maria Emma Santos, and Karma Ura 2008, Gross National Happiness and Poverty in Bhutan: Applying the GNH Index Methodology to Explore Poverty.

<http://www.ophi.org.uk/subindex.php?id=publications0>

(受付 平成23年7月15日)
(校了 平成23年9月20日)

